日露戦争と義勇艦隊
ホロホル艦隊の十二人
原著者 ハロ・ベ 編註者 ...
表紙

384
250

明治天皇の盛業大德

大日本帝業の古今

拓地、移植民、人種、民族、人口の諸問題

明治天皇の盛德大業

大日本帝業の古今

拓地、移植民、人種、民族、人口の諸問題

著者寄贈本

大正
9.10.11
寄贈

序

歐洲戰爭を一轉機として世界の形勢と時代の趨向は頓に一變した、と同時に、世界の五大國の一に列した日本の國際的立場は非常に苦しくなつた。十九世紀以降、世界は殆ど白人の舞臺となつたが、此間に獨り日本のみが東洋の一角から旭日冲天の概を以て躍進擡頭しつゝあるは、黃人のために正しく萬丈の氣焰を吐けるものと言ふべきも、それ丈け、他の嫉視、反感、猜疑、誤解を受け易く、軍國主義の侵略主義のといふ難癖を附けたがる者もあり喬木風多しの比喩の如く、何かと日本に對しての物議物論が多くなつて來た。明治の過去の日本と大正の現在の日本とは、對內的

にも同一でないが、對外的に餘程異つて居る。

日本は益々海外に發展しなければならぬ。是れは人口と食物との關係から來る必至の勢であるが、之と共に日本は他の黃人國又は黃人種の文化、産業、社會、風氣等を自己の發達と共に進歩向上せしめなければならぬ使命を有つて居る。然るに此の日本の海外發展に對して諸種の難題が多くなり、日本は國際上今や實に容易ならざる立場に在るのである。常習性となつた北米加州の排日は言ふ迄もなく、加奈陀に於ても、濠洲に於ても、日本人に對して其の門戸を閉鎖せんとし、我が海外移民は之がために尠からざる支障を蒙つて居るが、猶その上に支那及び西伯利への發展に向つても、動もすれば横槍が入るといふ有樣で、東洋方面にも排日

熱が高まらうと云ふ傾向を現じて來た。前者は猶忍ぶべきも後者に至つては全く忍ばれない。今日は黃人種が一致團結して黃人種乃至黃人國の進歩發達を圖るべき時であるのに、黃人の中に白人の手を藉りて日本を排擊せんとする者あるは、最も歎ずべき事で支那の謂ゆる以夷制夷策、支那人及び朝鮮人の事大思想と其の陰謀癖とは、實に此の悲むべき大失態を敢てして居る。日本の海外發展は日本自身の爲のみならず、一面黃人種乃至黃人國の向上進歩を核心として居るものであるのに、それを思はないで、區々の利害又は感情に囚はれ、白人の袖に縋つて一意日本を排擊せんとするは、淺慮も亦甚だしと謂はねばならぬ。

日本の對外策にも過失がないとは言はない、海外における日本

人の中に間違つた行動をなす者があるのも事實である。是等の事から起る他の反感は自業自得であるから、日本自ら省みて之を改めねばならぬが、排日の起る事情は左樣に單純なものではない。例へば支那における英米人の反日思想の如き、是れは日本の過誤から生じた點も多少はあるだらうが、要するに日本の對支發展が彼等の發展と利害上往々相容れざる所あるが爲めで、殊に第一位であつた英國の對支貿易を日本が追越したといふ一事は、在支英人の一般に面白くなく思ふ所に相違ない。併し是れは實力の爭ひであるから何うも仕方がない。然るにそれが面白くないと云つて日本を讒誣中傷し、更に支那人を使嗾して排日熱を高めしめるといふ遣方は、決して紳士的態度と言へない。その煽動に乘て排日

運動に騷ぎ廻る支那人も支那人である。又その尻馬に乘つて不逞鮮人までが蠢動を事とし、他の庇護の下に日本に向つて蟷螂の斧を揮はんとするが如きは實に論外の沙汰である。

此の如くにして日本の國際的地位殊に東洋に對する立場は益々難ケしくなつて來た。されど是れは日本の崛起擡頭に伴ふ當然の成行で、出る杭の打たるゝと等しく、寔に是非もなき次第であるイヤ寧ろ總ゆる艱難と障害の殺到する間を撓まず屈せず飽まで進んで行くところに愉快がある、決して悲觀すべき事ではない。孟子の「天將降大任於是人也、必先苦其心志、勞其筋肉、餓其體膚空乏其身、行拂亂其所爲、所以動心忍性、曾益其所不能」とは個人に對しての語であるが、國家の上にも適用が能きる。日本は此

の覺悟を以て進むべきであらう。艱難は汝を玉にすと云ふではない乎。雨降らば降れ、風吹かば吹け、江山の好模樣は必ずしも晴朗の時に限らず、却つて風雨の時に於て宜し。

併しながら夫れには、日本の大なる覺悟を要すると共に、日本は何處までも我が宏大無極の皇道を基として始終せねばならぬ。苟くも正義を經とし人道を緯とする我が皇道に率由して上下一心盛んに經綸を行はゞ豈能く吾を遮ぎるアルプス山あらんやで、一時は誤解も受けやう、中傷や讒誣も殺到しやう、妬みや嫉みも蒙らう、或はとても堪ゑ切れぬ樣な目に遇ふこともあらうと思ふが天は正義に與みす、結局は必らず光明の地に達するものと著者は確信する。過去の明治時代と現在の大正時代とは、四圍の光景も

内部の狀態も大分異つて居るが、それにも拘らず代々木の靈地に明治神宮の竣成せられたるを機會とし、嘗て草せし上古王朝時代と維新後明治時代の我が帝業を比說較論したる一文に修補を加へて之を「大日本帝業の古今」と題し、附するに拓地、移植民、人種、民族、人口に關する意見を以てして、茲に之れを公刊するに至つたのは、著者の堅き信念と耿々燃ゆるが如き己み難き一片の微衷に外ならぬ。博大、雄偉、仁慈、公明は我が皇道の眞面目で之を中外に施して悖らず、之を古今に照して謬らず、縱横無碍、圓蝠自在、往くとして可ならざるは莫しである。

本著は主として海外發展に關する意見を述べたものであるから一切他の問題には論及しないが、内政の刷新改善も一に皇道を基

として行ふべきものと信ずる。デモクラシーの眞髓は元來我が皇道の中に含まれて居るのであるから、時代に遲れぬやう、日新又日新以て絕にず國命を新にし民心を鮮にすべく努むるならば、社會主義、共産主義、無政府主義が流行しやうとも、露西亞農勞政府の宣傳と西伯利の赤化とが過激思想の傳播を助長しやうとも、敢て必ずしも危惧するに及ばぬことゝ思ふ。それには皇道に率由して意義ある社會政策的施設を着々實行せねばならぬ。固陋の見の打破すべきは言ふ迄もない事である。

大陸社にて

大正九年十月　　山田芙峰

凡例

一、本文『大日本帝業の古今』は明治四十五年　先帝崩御の砌、當時著書か關係し居りたる滿洲日々新聞に『王政復古五大綱目』と題して約十日間連載したるものに多少の修補を加へたるもの也

一、附說としての拓地、移植民、人種、民族、人口等に關する數篇は著者の主宰せる雜誌『大陸』に掲載せるものを等しく修補改訂したるもの也

一、先帝の神靈を奉祀せる代々木の明治神宮成り十一月一日その御鎭坐祭、同三日大祭を執行せられんとするに當り本著を公刊して之を江湖に頒つを得るは著者の最も光榮とし且欣幸とする所なり

六千餘萬の我の日本民族は既に統一せられたり。此の統一力を以て東亞の開拓進歩を計り、新領土其他の異民族を善導良化し、以て海外發展の實を擧ぐる事、是れ現代における我邦家の急務なり。君德を發揚し、皇道を宣布し、帝業を擴大する所以の道、亦之を措いて他にある事なし。今や世局丕に變し、人心亦大に革まる。則ち内に外に總ゆる刷新を施し、改善を加へ、新政策新施設を實行し、而して益々その生命を新たにし、且世界の大勢に遲れざらんやう、確乎たる國策を樹立し、上下一心、盛んに經綸を行ひ、以て將來の大成を期せざる可らざる也。

目次

大日本帝業の古今

緒言……一
第一章　内政の釐革……五
第二章　文化の攝取……八
第三章　異民族の包容……一三
其上　隼人族の討伐及ひ馴化……一七
其中　蝦夷族の征討及ひ撫育……二一
其下　歸化人の包容並に同化……二五
第四章　拓地植民……二九

第五章　韓國併合……三四
結　論……三八
附錄＝大正七年の植民地人口
附　說
第一篇　我帝業と拓殖道……一
第二篇　異民族に對する道……一一
第三篇　人口問題と拓地植民……二三
第四篇　滿鮮の關係と勢力の消長……四一
第五篇　北進の勢力と滿洲……五三

目次終

明治天皇

明治天皇の盛德大業

大日本帝業の古今

芙峰　山田武吉謹述

緒言

明治の代は既に過去となりぬ、而も此の過去四十五年間ほど内外多端にして能く治め能く整ひ又能く進みたる時代は是あらず。之を我國史の上に尋ねて其の比儔なきは無論の事、世界各邦の歴史に索むるも、短歳月の間に斯くまで異數の發達を遂げたる例は殆んど稀なり。人間業とも思はれざる此の絶倫無比の明治年間に於ける大革新、大整備、大發展は、天降種族の血統を繼承し玉ひて去んぬる明治四十五年七月三十日高天原高く神去りたまひし明治天皇の御稜威御盛德に基くこと言ふ迄もなく、而して

亦文武輔佐の臣僚が鞠躬盡瘁の功と六千萬忠良の臣民が至誠奉公の勞とに因ること明白々素より一點の疑ひを容るべき餘地あらず。或は曰ふ、先帝四十五年間の御治世は英國ビクトリヤ女王六十三年間の御治世に相似たりと、蓋し類似せる點はあらん、相同じとは言ひ難し。英京倫敦の『國民(ネーション)』は述べて曰く『明治天皇の御治蹟は天地創造以來嘗て之れに對比すべき何物もなし、ピーター大帝の如きは、陛下に比すれば單に露西亞開拓者の先頭たるのみ、ウヰルヘルム第一世と雖も、一王國を進めて獨逸帝國となしたるに過ぎず』と、此の言稍々當れり。實に先帝御登極以來の明治四十五年間は、大維新大改革の時代、小日本より大日本、舊日本より新日本に轉じたる時代、東洋の島帝國より世界有數の大帝國に進みたる時代なり。

抑々斯くの如き盛德大業は之を傳へて永く後昆に範を垂れんこと、是れ操觚文墨の責に在るものゝ當に努力黽勉せざるべからざる所なるも、吾人の寡聞淺學固より敢て其の任にあらず。唯だ吾人が爰に明治盛世史の一ページとして聊か筆を呵さんと欲す

る所のものは、明治年代の大業も之を約すれば王政復古の實を擧げ更らに之を擴充したるに在るを以て、則ち少しく其間の委曲に就いて解說を試み卑見を下さんとするにあり。夫れには先づ古代史に現はされたる大化革新前後の王政に關して一瞥を拂ふの必要あり。之れを一瞥して吾人の概念に纏め得たる所のものは(一)異種族の討平綏撫、(二)三韓との交通、(三)歸化人の同化、(四)支那及び印度の文化攝取、(五)內政の釐革といふ五大綱目なり。此內の第一、第二及び第三は千早振る神代の昔より行はれ、神武帝建國以降人皇第三十八代天智帝の王政振興時代を經て人皇八十二代後鳥羽帝の文治二年政權武門に歸せし頃まで、盛衰こそあれ、消長こそあれ、何れも天皇親政の下に行はれ、第四及び第五は人皇第十五代應仁帝時代より天智帝大化の革新前後に於て特に振ひたり。是等は國史を讀みたるものゝ皆能く知る所なるべければ、吾人は此上贅言せざるべきも、試みに如上の五大綱目を執つて之を明治天皇王政復古の盛業偉蹟に對比すれば果して如何。鎌倉覇府以來凡そ六百七十餘年間既墜の大權を回復

し玉へる明治盛世の時代は、疑ひもなく皇政の充實顯揚と共に一層之れを恢弘し、上下一心盛んに經綸を行ひ、開國進取大いに皇基を振起し、而して國威の隆、國運の盛前古未だ曾つて有らざる所なり。去れば上古王政時代の五大綱目は明治年代に於て內外共に其面目を一新し、之を約すれば(一)內政の刷新、(二)世界文化の吸取、(三)異民族の包容、(四)韓國の併合、(五)植民地の統治善導といふ事になり、頗る其の範圍を擴大し、紀綱を振作せり。明治盛世史の一ページとして吾人の說かんと欲するものは則ち此の五大綱目にして、之を上古王政の事業と比較し、皇基の振基、帝業の躍進其の由つて來る所の偶然にあらざるを示さんとするにあり。唯不文淺學說いて詳らかならず述べて盡さゞるもの多からんことを恐る。江湖博雅の士、微衷の存するところを諒とし垂教を吝むなくんば幸甚なり。

愛國心は大義に基き大德に因らざる可らず　（ポーリンブルック）

第一章　內政の釐革

明治維新の王政復古は先づ內政の釐革より始まり、內政の釐革は實に開國の國是決定に其端を發せり。明治元年正月の開交の詔、同一月の王政復古の詔、同三月の億兆安撫國威宣布の御宸翰、並に五箇條の御誓文は、明らかに其の歸嚮すべき所と率由すべき點とを庶衆に示されたるもの、灼然炳焉懸りて天日の如し。之を上古王政時代に對比せんか、改革の範圍、其の性質、進步の度合等、固より同日の談にあらず。上古王政時代に在りて皇威の最も振ひ紀綱の最も張りたるは神武帝紀元一千三百年乃至一千三百三十年の大化革新の時なるが、此の革新は源を紀元九百二十年乃至一千年の支那大陸文化の攝取時代に發して、中頃厩戸皇子の政制革定となり、彼の十七條の憲法制定となり、蘇我氏族長政治の打破と共に、煥然として頓に光彩を發揮し來れるものなり國初以來の大改革大維新にして、王政の基礎茲に立ち、邦家の內容こゝに至りて

整ひたり。何人も知れる如く、大化の革新といへば、明治以前に於ける我王政の最も振ひたる當時を回想せしむる史實にして、要は族長政治を破りて天皇親政の治となし中央に神祇官、其下に太政官を置きて政教一致の中央集權制度となし、太政官の下に八省を置き、百官を配し、全國を六十餘國、六百餘郡に分ち、從來の國造（クニノミヤツコアガタヌシイナ）、縣主、稻置（ギ）に代へて里に里長、郡に郡長、國に國司を置き、封建制度變じて則ち郡縣制度となり、猶ほ臣（オミ）、連（ムラジ）、伴造（トモノミヤツコ）、國造（クニノミヤツコ）等の私有地を官沒して公地公有の社會主義的土地國有を斷行したるが如き、寧ろ急進突飛の變革をも敢てし、之と同時に、唐の班田法に則りて田制を定め、其他稅制に、兵制に、諸種の改革を行ひたる處、實に能く王政の面目を發揮したるものと謂ふべく、皇室と臣民との關係之が爲めに頗る緊密となりたるは最も注目すべき點なり。然りと雖も之を明治維新の王政に比すれば固より言ふに足らず。政教を混淆し、急激に走り、形式に失したるが如きは其の缺點なり。次いで天武持統、文武三皇の治世を經て、制度の改善と其の整備、文化の進步、產業の發達等益

益著るしきものあり。年號の設定、族姓の制定、羅馬のヂヤスチニアン大帝が編纂大成せし羅馬法にも匹敵すべき律書六卷、令書十一卷より成る大寶令を初め、古事記、日本書紀の編纂等、總て此間に成りしは、以て其の當時に於ける王政の隆昌發達を想見すべく、康熙、乾隆帝時代の清朝の盛と雖も、曷ぞ克く及ぶべけんや。併しながら之を明治の光彩陸離たる皇政に比すれば、時代の然らしむる所とは申せ、其の缺漏の多き、瑕疵の寡からざる、遙かに劣れりと謂ふべし。明治皇政の內政釐革は僅に四十餘年間にして大綱既に張り細目略ほ整ひたるに、大化以來大寶前後までの內政改革は其の年數凡そ五十六年を要し、文化の攝取と其の消化とに幾分の遲緩を免かれざりしところ、また往時の今代に及ばざる所なり。殊に往古の王政が內政を充備したるに反して外政に失敗し、神代より持續し來れる三韓との關係を萎縮し、景行帝の英略、神功皇后時代の雄圖、茲に全く蹉躓し、日本をして竟に海東の島帝國たらしめしは、是れ其の大なる失計にして、之を明治の皇政が二十二年憲法發布前後に於ける內政の充

備と共に着々外に向つて進み、日清並に日露の二大戰役を敢行し、遂に韓國を併合し猶ほ臺灣、樺太等南北に亙りて植民地を奄有し、關東州を租借地とし、滿蒙を特殊地域とし、一躍世界の强國となり、皇威八荒を掩ひ、國勢中外に暢びたるに比すれば、大小輕重固より日を同じうして論ずべきに非ず。明治の皇政が復古の偉業を大成し更に之を擴充して遺憾なきこと以て知るべきなり。

第二章　文化の攝取

他國の文化を吸取して長を採り短を補ふは我帝國傳來の特風なり。明治維新前には二百餘年來鎖國の陋習と偏狹なる儒教主義との爲め、曾て支那が自ら中華を以て居り他を夷狄視したるが如く、日本を神洲とし外國を野蠻視したるもの多く、德川覇府政治の末造に方りてや、尊王の大義に結ぶに攘夷の旗印を以てし、燕趙悲歌の徒、慷慨激越の士、所在に群蜂の如く振ひ起ちしと雖も、是れ固より一時の變象に過ぎず、其

當時に於ても、一部には蘭學の研究に由りて泰西文物の長所を認知したるもの尠からず。之を以て、幕府大政を奉還し、王政爰に復古するや、明治元年先つ開交の詔下り次いで五箇條御誓文の宣布となり、内に『智識を世界に求め大に皇基を振起すべし』との御諚あるに迨んで、一時の謬れる思想は恰も霜雪の朝暾に消ゆるが如く忽焉として全く其影を潜めぬ。斯くの如にして我が帝國傳來の特風は再び蘇へり、爾來各國との交際と共に盛んに世界文化の攝取に努め、制度の改革、文教の刷新、其他累次の更新、一として皆端を之れに發せざるはなし、熾なりと謂はざるべけんや。王政復古の實之に依て則ち全たく、而して文明國としての我國の内容は之れが爲めに豐富となり優秀となり、隨つてまた複雜となれり。

飜つて上古王政時代に於ける文物輸入の狀況を顧るに、其の文物制度は漢大陸のものを主として吸收し、更に印度の宗教を容れ、之を容るゝや、初めは專ら三韓に依り次いで唐朝及び隋朝との交通と共に直接輸入となり、而して其の最も振ひたるは神武

帝八百餘年後の應仁朝以降のことに屬す。當時の文物媒介者たりし三韓と我が帝國との交通は、素盞嗚尊が五十猛を從へて朝鮮に行きしてふ神代より行はれたるも、大和朝廷が直接渠等と交通せしは蓋し崇神帝の終より垂仁帝の初めに在り。當時殉死に代ふるに土偶を以てせしが如きは疑もなく漢土文明の影響なり。他國の文化は斯くして專ら朝廷の手に由りて輸入せられ、驛路の設、釀酒の法、機業、養蠶、製糸の如き生產事業の發達、此間に於て既に見るべきものありき。更に應仁天皇の十五年には論語千字文の如き支那典籍の輸入ありて、精神的文明も亦著しく發達せり。醫術、音樂、製陶の類も相尋いで起り、一般國民の思想亦隨ふて進歩せり。其後欽明天皇の十三年には佛敎の輸入あり、是れも朝廷において採否を決し、其の敎ゐは後年僧行基の出づるまで主として朝廷及び貴族の間に信仰せられ、皇室よりは彼の厩戸皇子の如き大佛敎家を出すに至れり。天智帝大化の革新も、桓武帝の中興的改革も、要するに是等文化の攝取消化によりて獲たるものと謂ふべく、平安朝時代の燦然たる文化に至りては

殆んど其の融合圓熟の絶頂に達したるものと謂ふべし。蓋し斯くの如きは則ち漢土文物の渡來以前已に我帝國に一種優良なる文化の素質ありたるが爲めにして、其の結果模倣時代も心醉時代もありたれど、他の文化の爲めに征服せらるゝが如き不見識を爲さず、吉備眞備の眞假名、僧空海の平假名、即ち漢土文明の象形文字とは反對なる聲音文字も案出せられ、飽くまで採長補短の特長を發揮し、終には全く特殊の文化を形成し、組織し、而して其の文化は絶へず進歩し來れり。

既往已に斯の如し、將來豈然らざるの理あらんや。維新王政の復古と共に盛んに歐米の文物を輸入し、攝取し、而して專ら知識を世界に求むる事となりしは、固より決して偶爾にあらず。唯現在は猶ほ攝取時代に在るを以て未だ克く之を融合同化するに至らざるのみ。斯る場合、思想界の動搖と混雜とは、殆んど避くべからざる勢といふべく、直譯、請賣、模倣の多くして創作、發明、發見の寡きも止むを得ざる所なり。去れど學界の一部には盛んに新研究の歩を進むるありて、現に世界學術界のレコード

を破りたる者さへあり。既に支那及び印度の文化を攝取し融合し同化したる以上、更に歐米の文化をも綜合融化して之を大成するは、東西文明の湊合地點となれる我が帝國當然の責務にして、此事は王政の復古に伴ふ我が帝國の重要なる使命なり。上古王政時代の文化攝取は其の範圍狹く其量も亦多からざりしが、王政復古の明治年代以降に於ける文化攝取は範圍甚だ廣く其量も亦頗る多きを以て、乃ち之を融合大成せんこと一朝一夕の故にあらずして、今日猶ほ混沌未成の域に在るは寧ろ當然の事に屬すと雖も、僅々四十餘年間之を攝取して直ちに之れを應用し、東洋の一角に燦然たる一箇の文明國を現出せしは、以て聊か誇るに足れり。今後も聖旨に基き益々智識を世界に求め大いに皇基を振起せざるべからざる也。

明治天皇御製（巖上龜）

うこきなき秋つしまねのいはのうへによろつ世しめて龜はすむらむ

第三章　異民族の包容

異民族の討平綏撫は上古より中古に亙れる王政の大要目にして、神武天皇の創業も其後の歷代朝廷も、之れが爲めに多くの苦心慘憺を嘗められたり。王政復古せる明治の治世に至りては、古代歷朝の絕ゑず劬勞せられたる國內の異種族は全く討平せられ同化せられ、邊彊北地に多少の殘存あるも、其性化して柔順となり、亦深く意を用ふるに足らず。則ち普天の下、率土の濱、悉く是れ王臣にあらざるはなく、六千萬臣民は大和民族と云へる總括的名稱の下に全然統一せられたりと雖も、之と共に海外の地に多くの異民族を包容し統御し綏撫し且つ良化せざる可らざる事となれり。北海道のアイヌは則ち上代蝦夷族の殘存種族にして、此地今は內國植民の要地となり、明治五年我が版圖に歸し同十二年沖繩縣となりたる琉球の土着民も、嘗ては王化以外に在りたる人種なるも、今は化して大和民族の中に入り、更に日清役の結果我が領土に編入

せられし臺灣の漢人種並に生蕃人、日露役以來我が保護の下に立ち次いで併合せられたる朝鮮人、是等は上古に於て我が民族と多少系統を一にし、朝鮮人の如き殆と同種同根の人種と言ふを得べきも、久しき間の相互の離隔は其の氣風、性情、習俗、言語に多くの相異を來せるを以て、今日に於ては何れも之を異民族として取扱はざるを得ず。內に纏めて外に及ぼし、斯くの如く洋の南北に亙りて諸種の異民族を包容せる明治の時代は、疑ひもなく復古の帝業を宏弘し擴大したる所以のものにして、是れ實に歷世その類を見ざる曠古の偉業なり。而して此の曠古の偉業を解するには、溯つて古代王政の異人種に對する討平綏撫の大要を辨知し置くの必要あり

日本最古の人種に就いては學者間の意見未だ一定せず、或は小人種にして欵冬の葉の下に住居せしと言はるゝコロボックルなるものを日本最古の人種と說くものあれば或者は之れを北海道、千島及び樺太に於ける蝦夷族の一種と見做せり。孰れにもせよ早くより我島國に棲息せし蠻族の是れありしは爭ふべからざる事にして、吾人は爰に

之を東北邊疆の地に蟠居せし蝦夷族と認め置くべく、而して此の蠻族こそ上古中古に亘り歷朝の最も心を致して討平綏撫に努められたるもの、王政復古前の封建時代に於ても幕府は松前藩及び津輕藩を置きて之が鎭撫に意を勞したり。此の蠻風粗野なる異人種の外に南の方九州地方には兇悍にして勇武克く戰ふ所の熊襲、隼人の異種族ありき。熊襲と稱し隼人と言ひて古史には其の名を異にするも、實は同一種族なり。假に之を異種族と見做すも、此の種族は日本國を肇造せる優等人種たる天降種族即ち大和民族と同一のものに屬し、猶ほ古史に散見する土蜘蛛なる種族は優等人種が蝦夷族又は熊襲族の或る劣等種族を指稱せるものにして、本來斯る人種の是ありしには非ずとの說あり。其說の當否は兎に角、此等の異種族も大和朝廷が歷世その討平綏撫に深く意を用ひられたる人種にして、這は比較的早く同化し、蝦夷族の如く久しく我王政の累たらざりしも、一時は頗る統治難を感じたるもの也。上古中古の王政時代に在りては、是等邊疆の民未だ我が王化に潤はず、大和朝廷の基礎猶ほ鞏固ならざるに乘じて

或は叛亂し、或は動搖し、常に不穩の狀勢ありしを以て、神武東征以降時に之を討ち時に之を撫けし我王政の苦心慘憺たる事蹟は歷々史乘に徵すべきものあり。此事は今日我が帝業の下に包容せられたる臺灣、朝鮮、樺太、若くは南滿洲等に於ける異民族の統治綏撫の上に大に參考とすべきものなるを以て、吾人は以下之に就いて聊か詳解を試むべし。夫れ帝業は蕩々たり、王道は坦々たり、是等海外の新領土、租借地、勢力範圍等に於ける異民族も、今は則ち我が新附民族若くは化内民族として大和民族と共に等しく皇化の下に一視同仁の惠に浴すること勿論なるも、之が統御と綏撫とには深慮熟察遠きに涉りて不易鞏固の政策を樹てざる可らずして、是れ復古の王政を擴充し、宏弘し、而して我が大日本帝國を萬代ならしむる所以の最大最重の要務なり。帝業翼賛の途、特に之を以て重しとなす也。

竭身命以殉國、經夷險而一節者忠臣也。（抱朴子）

異民族の包容

其上　隼人族の討平及ひ馴化

古代帝業の猶ほ四隅に汎ねからざりし當時に於ては、謂ゆる邊疆籌略は我が王政の一大要務にして、王朝の權威は此際大和附近を中心として漸次邊疆に及ぼしたりし也漢書に倭人百餘國と稱し、後漢書に使譯を通ずる三十餘國など記せるは、則ち其の當時を指せるものにして、北陸奥羽地方の蝦夷族及び九州の隼人族は此の時代に於て最も猖獗を極めたり。先つ隼人族より述べんに、人皇十代崇神朝の時代は大和朝廷の權威頓に發揚せられたる時にして、彼の四道將軍の簡派と共に邊疆不順の民は一時討平せられたるも、實は未だ全く其根を絶ちしに非らず。之を以て人皇十二代景行天皇の時代には、有名なる九州大遠征の擧を見るに至れり。此の遠征は則ち熊襲征伐（當時は隼人族を熊襲族と稱したり）にして、前後七年を要し、鎭定後復た叛亂せし爲め、

皇子日本武尊をして更に之を討伐せしめ、次いで奥羽北陸の征討となり、東北の蝦夷族も此際王師の爲めに鎮壓せられたれど、而も全然歸順せしに非ず、東北邊疆の不穩なりしは勿論、九州の一角猶ほ風雲の急を告ぐること屢々なりき。

或る古史（新撰姓氏錄の如き）に據れば、人皇十九代允恭天皇の時代、薩摩國の隼人族は全く平定せられたるが如くなるも、是れ其の一部にして、其の以後も渠等は兎角動搖し、騷擾し、筑紫の島の南部、今の大隅薩摩の邊に蟠居せし隼人族は、久しき間我が皇化に霑はざりしものゝ如し。當時彼等の部落には酋長則ち魁師（イサオ）なる者ありて同族統率の任に當り、是等の魁師は時々大和朝廷に入貢せしと雖も、中古の初期までは尙ほ半獨立の狀態に在りしと見らるゝ節あり。實際此の時代の九州西岸は叛志に富める强悍なる人種の巢窟たるが如き趣ありて、人皇二十六代繼體天皇の治世には、筑紫の國造（クニノミヤツコ）イハヰの大叛亂あり、辛うじて之を討平せり。斯くて帝業の基礎益々鞏固となりし天智天武の朝を經、人皇四十二代文武帝の頃には、大化の革新に則

り、薩南にも郡を建て、評督（コホリノカミ）及ひ助督（スケ）を置きたれども、是等一郡の大領小領には土豪を以て之に任し、諸事概して舊慣に由りしものゝ如く、而して此折にも隼人征伐の事あり、其の平定に歸するや、薩摩の國內要害の地に柵を築き戍を置きて之を守りたり。其後の人皇四十四代元正天皇の養元四年、隼人叛して大隅守揚候麻呂を殺しゝかば、朝廷將を遣はして之を討ず、翌年皇軍凱旋し、斬首捕虜一千四百餘と古書にあるを以て、其の頃も渠等の異種族は猶ほ不穩の裡に在りしものと思はる。斯くの如く古代の王政は異種族の討平及び鎭撫に歷朝その心を勞したるが茲に注意すべきは、此等の討伐と共に渠等種族の或者は之を郡領其他の役に任じ、或者は之を畿內その他に移置して其の馴化に努め、前後通じて大和朝廷が絕ゑず渠等を歸順せしむる事に意を用ひられたる事是なり。人皇二十一代雄略天皇の頃、隼人等既に畿內に來り、朝廷に仕へ、命を奉じて檢察搜索等の任務に服せしもの尠からず。隼人族が其本土を離れて畿內の邊に移住せしは既に上古の時より是ありし事なるも、爾

後その討平毎に渠等を移置し、中古の頃は衞門府の所管に隼人司なる者あり、其の長官を隼人正といひて專ら隼人を檢核することを掌どり、上古よりの移住隼人に對して其後の移住隼人を今來の隼人と稱し、朝廷より時服及び米鹽等を支給して之を養はれたり。されば中古の世、五畿内及び近江、丹波、紀伊等の地に隼人の住居するもの益〻太なりしは明白なる事實にして、古史には一々明らかに之れを記し居れり。九州の異種族にして屢々王師に抗したる隼人種族も、此くの如くにして漸次平定せられ、而して古代の王政が一面彼等の馴化に努められたる事蹟は、海外に幾多の異民族を包容せる今日に於て、謂ゆる復古の王政を宏弘し擴充する所以の一要件として、吾人の最も注意を要する所なり。

明治天皇御製（社頭祈世）

とこしへに民やすかれと祈るなる
わかよをまもれ伊勢の大神

異民族の包容

其中　蝦夷族の征討及び撫育

異種族の討平綏撫に就いて古代王政の最も苦みたるは蝦夷族なり。此種族は今や頗る柔順にして北海道及び樺太の邊隅に謂ゆるアイヌ人種として其の餘喘を保つに過ぎざるも、往古は其性甚た强悍にして叛亂を企て騷擾を起したること一再に止らず。日本武尊の東夷征伐は一時渠等の氣勢を挫きしも、彼等は元來野獸に等しき蠻族なりしを以て、其後も事ある毎に屢々蠢起して我が王師を煩はしたり。大化革新の紀綱漸く弛み來れる人皇五十五代聖武天皇時代には、蝦夷族頻りに邊疆を騷がせしかば、坂東八州、筑紫、九州の兵を擧つて天平九年之が大討伐を擧行し、人皇五十代桓武天皇英邁の資を以て國狀改革を斷行し王權再び振興せる時にも、彼等は猶ほ擾々を事とし、其の延曆六年に北狄韃靼人と結托して大いに叛亂せし爲め、大和朝廷は坂上田村麿を

征夷大將軍として交戰數年の後漸くにして之を平定せり。頑强なる蝦夷族も此の一擧に依りて頓に鎭定せられたるも、渠等の內猶ほ王化に服せざる者ありて、其後も時々擾亂を企て蠢動を敢てしたることは史上に散見する所なり。古代の王政が蠻風粗野なる異種族の討伐に苦しまれたることは凡そ斯の如し、之と同時に、大和朝廷は一面彼等の綏撫馴化についても亦頗る意を致したり。

當時の帝國は東北邊疆なる未開の地域を以て有望なる植民地と見做し、之が經略に心を勞し、內地より人民を移して之を開拓せしめたるが、此の邊疆籌略は古代帝業の大眼目にして、蝦夷族の叛亂は一面之に對する反抗と看るべく、此の事は今日植民地の開拓に對して往々土着人の反抗を看ると略その揆を一にするが如し。去れば、當時の王政は蝦夷族の討伐と共に漸次東北邊疆の開拓に步を進めたること無論なるも、蝦夷族は必ずしも之を討滅し又は驅除するを目的とせしに非ず、其の歸順せし者は之を內地に移し、或は饗を給し、祿を賜ひ、或は職を授け、業を與へて、謂ゆる民夷雜居

の下に之が同化に努めたること到れり盡せるものあり。其內俘虜として獲たる者は之を神社に奉りて其の隸屬の民たらしめ、又その內地に移せしものは之れを諸方に放つて徐々皇化に浴せしめ、勇敢なる壯丁は之を兵士として用ひたる事もあり。奈良朝並びに平安朝時代に至りては、蝦夷族移置の地方は益々その範圍を擴張し、而して其の地は伊勢、遠江、駿河、甲斐、相模、武藏、上總、下總、常陸其他凡そ三十五箇國乃至四十箇國に涉り、九州島の東南隅に位する日向の地にも移し置かれたり。異種族たる蝦夷族は此の如くにして撫育せられ、同化せられ、之に關する大和朝廷の政策は懷柔懲肅兼ね用ひ、謂ふところの恩威並行、寬猛兼濟に努めたるも、或場合には余りに懷柔に失し却つて彼等を矜驕ならしめたる事あり。酋長に授くるに爵位を以てし、入京を許し、朝宴に列せしめ、又は租稅を免除したる等の事ありたるが、是等は即ち其の過ぎたるものにして、亨祿本類聚三代格卷十八貞觀十一年十二月五日の太政官符に『彼夷俘等分居諸國、常事遊獵、徒免課稅、多費官粮』とあるは、懷柔に過ぎたるを

謂へるものと見るを得べし。延暦十九年五月己未甲斐國の上言に『夷俘等或は百姓を凌ぎ婦女を姦し或は牛馬を掠め取り意に任せて乘用す』とあるは、彼等の蠻風度し難かりしを示すと共に、一面恩に馴れて如何に跳梁せしかの一端を想ひ見るべく、蝦夷族數次の叛亂中には此の類の叛亂もありしものと思はる。茲に於てか、『凡群盜之徒自此而起、今不禁遏如後害何』との太政官符を發するに至り、更らに嚴肅の手段を執りしものゝ如く、之を約するに、此の北狄東夷の征服には歴朝一方ならず聖意を勞せられたるを察するに難からず。異種族に對する古代皇朝の歴史は概畧斯の如し。之を以て今日の域外異民族に對する關係に對照し來らば、味ふべきもの、攷ふべきもの、龜鑑とすべきもの、其間多々是あるを發見すべし。

明治天皇御製

罪しあらは吾をとかめよ天つ神
民はわか身の生みし子なれは

異民族の包容

其下　歸化人の包容並に同化

古代の王政が異種族を討平綏撫して漸次國土を開拓せることは既述の如くなるが、爰に注意すべきは、是等異種族の撫育馴化と共に、更に多くの歸化人を包容同化せし事是なり。應仁朝の時、百濟の阿直岐、王仁などの來りしは我國より招聘せしものなるも、其後に至り、後漢の靈帝の子孫と曰はるゝ阿知使主なるもの十七縣の民を率ゐて歸化し、又秦の始皇帝の子孫なる弓月君は一百二十七縣の百姓を率ゐ朝鮮を經て歸化せしと云へば、數こそ不明なれ、其の歸化人の夥たしかりしは推想に難からず。斯く多數の歸化人ありしは、彼等が我が國土の美と我が王政の善を聞き傳へて之を慕ひ來れるものと謂ふべく、當時既に我が王政の海外に振ひたる事、亦以て想見すべし。去れば其後も追々と歸化人增加し、百濟の僧勸勒、高麗の僧曇徴が歸化して我國に種

種の文物技藝を傳へたるは、誰も知る所、次で百濟、任那の滅亡と共に其國の民相率ゐて歸化し、高麗の亡ぶるや、更に益々歸化人の數を增加し、或時は四百人、或時は八百人てふ風に續々歸化人を見るに至れり。平安朝の初期に方り、京都及ひ五畿内の氏族一千一百八十二氏を數へたる内に、高麗、百濟の兩國人の子孫實に百六十七氏、即ち總氏族數の一割四分以上を占めたりとの事なるが、之を以て見るも當時の王朝時代に歸化人の如何に多かりしかを察するに餘りあるべし。

支那及び印度の文化を攝取するに努めたる當時の王政が、是等歸化人の爲めに更に多くの文化を寄與せられたる事は固より言を俟たず。支那の典籍、印度の經典を擴めたるは勿論、養蠶、機業、釀酒、硝子、牛乳其他の工藝を進めたることも、歸化人の力與つて尠しと謂ふべからず。推古天皇の時代、小野妹子再度の渡隋に附從せし留學生の中に歸化人の子孫多かりしといふ事も、亦その文化を卜すへき一端にして、且この時は是等歸化人が殆と全く我が大和民族の中に融合淘冶せられしことを推知するに

足れり。斯く考察し來れば、神代より上古中古に亙りての當時の王政は、天降種族より成れる皇室と之を圍繞せる同種の優勝人種とが皇國の中堅となりて、其下に異種族たる東北の蝦夷族、九州の隼人族を包容し、更に支那及ひ朝鮮よりせる歸化人を包容し、而して之を綏撫し、同化し、此間皇化は徐々として邊疆に及ぼし、文化も亦隨ふて發達し、斯くて其の邦土の發展と共に、是等の異種族及び歸化人は何時の間にか融化改鑄せられて大和民族といへる一民族の内に統一せられたること明らか也。此事は我が國體の淵源にして且我が歷史の尊き所なれば最も注意を要す。支那の如きは東夷西戎、南蠻、北狄の爲めに屢々惱まされ、遂には其國を奪はれ、元となり、金となり明となり、清となり、易姓革鼎、君主常に其系を代へ、種族間の讓奪攻爭甞て休む時なきも、我國には毫も斯る事なく、天降種族は不斷に優勝の位置を占め、而して其下に異種族と歸化人とを包容同化し來れる也。

佛人ギュスターヴ、ル、ボン氏は其著『民族發展の眞理』の中に、國民魂の三大根基

を數へて共通の感情、共通の利害、共通の信仰と爲せしが、皇室を中心として動き來れる我が大和民族の如きは即ち當に此の國民性を備へたるものと謂はざる可らず。何となれば、我が國民には異種族及ひ歸化人等を含むも、开は既に古代王政の時に於て略統一せられ、其後益々統一せられ、紀元二千五百七十二年後の今日に於ては、優勝種族の强大なる同化作用の下に全く一民族となり、大體に於て、總て共通の思想感情を有するを以て也。種々なる學問文藝の輸入と共に、國民の思想に若干の動搖を見るは避け難き勢なるも、此の國民性の根抵には斷じて動搖あらしむ可らず。既に此の民族的統一あり、而して王政も亦古へに復せし今日、光輝ある皇室の威力と統一せる民族の力とを以て、更に外に向つて發展し、明治廿八年以來、先つ臺灣を領有し、次で韓國を併合し、更に樺太の一半を回復し、餘威延て南滿洲に及ぼし、其の奄有、統治開發と共に多くの異民族を包容し、國勢の發展、國力の充實、之に伴ふ民力の伸張大に見るべきものあるは、是れ王政復古の王政復古たる所以にして、此事なければ復古の皇政は一時武人の手に委せし政權を回復して之を改革整理せりと云ふに過きず。茲に於てか吾人は別に此事を一綱目として論ぜざるを得ず。

第四章　拓地植民

復古の皇政中殊に偉大なるは拓地植民の事業なり。此の事業は古代の王政には謂ゆる邊疆籌略として內に行はれ、外に向つては三韓地方に及ぼし、是等の地一時は我が藩屏又は屬邦たる趣を呈したるも、大化以降全く之を放棄し、爾後專ら內にのみ行はれしが、復古の皇政は之を回復したるのみならず、更に其の版圖を擴張し、民衆を外に向はしめ、著るしく其の規模を擴大せり。是れ明治盛世史中最も光輝ある事蹟にして、皇威の發揚せる、國土の膨脹せる、前古未た曾て有らざる所なり。試みに地圖を取て之を看よ、渺たる東海の島帝國は南の方琉球及小笠原島を經て臺灣を奄有し、北

は北海道を列ねて樺太に及ばし、更に朝鮮を併有し、關東州を租借地とし、蜒々遠く南北に伸びて今や當に大陸的一大帝國たらんとしつゝ有るにあらずや。之を面積と人口の上に就いて見るも、明治天皇踐祚の慶應三年に於ける日本國土の面積二萬四千三百四十餘方里は、今日殆と倍加して四萬三千九百七十餘方里となり、人口も逐年頻りに增加し、之を明治五年の人口三千三百十一萬八百二十五人に比すれば、今や本國人口のみにても五千七十五萬一千九百十九人となり、之れに各植民地の新附民を加ふるときは、實に六千七百九萬七千七百四十九人（明治四十三年末調査）を數ふに至れり。此の人口數は關東州及ひ南北滿洲を除外しての計上なり。今その植民地及ひ租借地の面積及ひ人口を表示すれば凡そ左の如し。

△臺灣

面積（屬島を合せて）	二千三百二十四方里餘	（明治四十三年末調査）
人口（臺灣人生蕃人）	三、一〇六、二二三 一二二、一〇六	

合計　三、二二八、三二九

△朝鮮　（同上調査）

面積	一萬四千百二十三方里餘	
人口（朝鮮人）	一三、一一五、四四九	

△樺太　（明治四十二年末調査）

面積	二千九百十七方里餘	
人口（土人）	一一、〇五二	

△關東州　（明治四十三年末調査）

面積（屬島を合せて）	二百十八方里餘	
人口（支那人）	四五七、三七三	

備考　以上は內地人を除外したるものなるが內地人は臺灣に九萬八千〇四十八人、朝鮮に十七萬一千五百四十三人（約二十萬に上れり）、樺太に二萬三千八百九十七人、關東州には日本人として六萬二千三百三十八人若しくは其の以上あり

以上の如くにして、明治の皇政が古代王政の邊疆籌略を擴張し且雄大ならしめたる事眞に驚くべきものあり。是れ豈に武門政治、封建政治の能くする所ならんや。然れども爰に攷ふべきは以上の各植民地及び租借地に於ける異民族の同化問題なり。是等の異民族は現に我が皇化の下に包容せられ、統治せられ、一樣に我が政令に服從しつつあるも、眞に之を同化融合せん事は容易の業にあらず。之を古代王政の當時に稽ふるに、彼の時代には蝦夷、隼人等の異種族及び歸化人を包容し、而して之を同化せしも、方今は其の當時とは時勢異なり、事情亦同じからざるを以て、臺灣の漢人種及び生蕃人、樺太土人、朝鮮人並びに關東州の支那人を同化せん事は一朝一夕の故にあらず。大正以後の皇政は實に是等異民族の包容同化に就て苦心せざる可らず、隨つて直接その衝に當る文武の臣僚たる者は深く其の將來を思ふて皇猷を翼贊し皇謨を擴充するに切々孳々の誠を致さざる可らず。我が大和民族は既に統一せられたる一民族なるも、斯くの如く多くの異民族を包容し、而して其の拓地植民の實を擧げざる可らざる

今日に於ては、是等異民族の綏撫統治に就て多大の工風を要するや勿論なり。此の工風は古代王政の異種族統治に比して更に數倍の困難を感ずるや亦固より其所なり。凡そ異人種又は異民族の統治ほど至難なるものはなし。民族問題の紛々たる、嘗て獨逸が對ポーランド人策に苦心せる、皆その例として看るべきものに屬す。我國は二千五百七十餘年の歴史を經て、内に既に民族の統一を成就したるも、王政の復古擴充と共に外に多くの異民族を包容するに至りたれば、吳々も此點には深甚の注意を拂ふて萬遺算なきを期せさる可らず。況や支那問題を中心として東洋之より益々多事ならんとする今日に於てをや。上下協戮、萬衆その心を一にし、此の永遠の大事業に拮据盡瘁して以て皇基を振起し國威を發揚せざるべからざる也。

明治天皇御製

重荷ひく車の音そ聞にける
てる日のあつさ堪にかたき日に

第五章　韓國併合

復古の王政に於て最も復古の意義に叶ひたるものは韓國の併合なり。大化の革新以上に出でたる內政の釐革、制度の改善、憲法の實施等も復古王政中の丕業に相違なく臺灣の領有、樺太の回復、關東州の租借等も古代王政の上に出でたる偉大なる帝業の發現なるも、若し韓國を併合する事なくして了らば、明治維新の皇政は畫ける龍に瞳を點せざるが如く、甚だ拙なきものと爲るべかりしに、明治四十三年八月斷然韓國を併合して之を我が領土に收めたるは、眞に我が皇政の面目を發揮して遺憾なきものと謂ふべし。蓋し王政復古の明治初年以來我か帝國の朝鮮の爲めに苦心せるや一日の故にあらず、征韓論の沸騰は言ふも更なり、明治九年二月には江華條約に依て朝鮮を一の獨立國と認め、同十五年及び十七年には京城の變亂に遭遇し、爾來種々の苦心を重ね、竟に二十七八年戰役の開始となり、同時に日韓攻守同盟條約に依りて更に朝鮮の

獨立自主を宣言し、其の國號を新たに韓國と稱し、茲に全く朝鮮に於ける清國の勢力を排除し得たるも、事大思想と娼婦的政策に囚はれたる朝鮮の王室と貴族及び兩班等は、猶ほ我が帝國を輕んじ、更に露國の勢力を援いて我れに對抗せんとせしかば、我が帝國は重ねて種々の辛酸を嘗め、二十九年五月の山縣ロバノフ議定書には又々韓國の主權及び獨立を確認する事を約したれど、元來朝鮮は獨立の力なき邦土にして、斯る約束は元々實勢の許さざる所なりしを以て、止むを得ず、我が帝國は三十七年起つて露國と干戈を交へ、斯くて先つ韓國を我が保護の下に置き、次いで之を併合する事となりし也。以上は明治初年以來同四十三年に至る迄の對朝鮮史の大要なるが、此間に費したる我が帝國の犧牲は有形無形共に非常なるものにして、我か皇政は實に朝鮮の爲めに一方ならざる心血を傾注したりし也。

明治の皇政が斯くの如く朝鮮の爲めに辛苦したるは、東洋の平和と帝國の自衞との爲めに外ならざるも、一は我國と朝鮮とは其の關係頗る密にして、古代に於ては殆と

宗主國と附庸國との干繫にありしかば、乃ち之を古へに復し、合して一となつて共存共榮するが双互の幸たりしを以て也。之を我國より言へば、此事は則ち復古王政當然の面目を發揮したるものにして、王政復古の事業中、韓國併合は殊に復古の事業として偉大なるもの也。試みに少しく古史を點檢せんか、古傳說にある朝鮮開國の祖檀君と我が素盞嗚尊との同一人觀の如き、新羅の始祖赫居世と神武天皇の兄君稻氷命との關係の如き、是等は姑らく措くとするも、馬、弁、辰の三國併立時代より、百濟、新羅、高麗の三韓鼎立時代まで、我が帝國の權威が朝鮮半島に光被し、寧ろ之を帝國の一部と爲したる事は、我が古史中想見に難からざる所なるのみならず、山海經、漢書後漢書、魏志、宋書等に就いて見るも、亦爾く認むべき節あり。崇神朝の時代には任那即ち加羅國より保護を請ひたる爲め鹽乘津彥を鎭撫の爲めに遣はされたる事もあり又加羅國の王子蘇那曷叱知の來朝せし事もあり。此間三韓の我朝に入貢を絕たざりしは勿論、彼の土のもの來つて我國に移住歸化せし事の屢々なりしは前項既に述ふる所

の如し。神功皇后の三韓征伐は彼等の背反を膺懲せしものにして、其後三韓に對する我が勢力は一層確實となりしも、天智天皇の時代に至つて、我が王政は內治の改革に專らなりし爲め、半島に向つて亦十分に力を用ふる能はず、遂に之を放擲するの止むを得さるに至れり。古代に於ける日鮮の關係は凡そ斯くの如し。去れば、明治維新の王政復古と共に、我國か累次朝鮮問題の爲めに多大の心血を傾注したるは故なきに非ず。而して竟に之れを併合し、太祖李成桂以來二十七代五百一年の李朝爰に仆れて、日鮮の關係全く古へに復し、伊太利半島に比すべき約一萬四千方里の邦土と瑞典、那威、丁抹三國の人口を合したるに等しき約一千數百萬の民衆とを擧げて我帝國の中に收めたるは、決して偶然の事にあらす。且その併合の合理的にして其の方法の妥當なりしことは、千八百八十年佛國のタヒチ島合併、米國の布哇併有、千八百九十五年佛國のマダガスカル併合、千八百四十八年墺國のクレコー合併に比するも、猶遙かに優れるものあり。貧弱なる朝鮮と不遇なる朝鮮人とは、之より我が皇恩の雨露に浴して

萎にたる生氣を回復せんこと固より疑ひある可らす。復古の王政は韓國併合に依て眞に有終の美を濟せしものと謂ふべく、此の本旨は飽まで貫徹の要あり、而して是れ我皇の稜威と我國民の力とに由つて得たる偉大の事業なり。

結論

明治の王政復古は曠古の盛業にして歴史上の一大奇蹟とも言はるゝ程なれば、五大綱目として吾人の叙説せるものも、實は其の一部に過きず。彼の外交の振作、即ち安政年間に締結せる互市條約を初め、其後取結べる累次の屈辱的偏務的條約を改正して之を自主的對等的條約となし、先づ法權を回復し、次いで稅權を回復し、我が帝國をして竟に世界の一等國、文明國となすに至りたるが如きも、亦特筆すべき復古王政史中の偉業たるや勿論なり。去れど、是等は內政の釐革、制度の改善、文化の攝取より來れる結果にして、二大戰役以來、國威頓に輝き、外に向つて大いに實力を發揮したることも、亦此の事由に基くものなるを以て、外交の事業、之に關する當局の功勞、固より大なるも、吾人は玆に之を取立てゝ論ぜざるべし。幣制、稅制、其他財政上の改善、軍制の改革、教育の振興、行政並びに司法上の變革、憲法以下諸法律の整備等復古王政の事業は多種多端にして光彩眞に陸離たりと雖も、是等も內政釐革の內に包含せらるべきものなるを以て、吾人は努めて其の梗概を擧け、其の大綱を示し、之に關する細論は總て之を省くことゝなせり。是等のことを一々設章分目して說くは容易にあらず、又到底短日月の能くする所にあらざる也。

之を要するに、復古の王政は鎖國より開國となり、保守より進取となり、消極より積極となり、內に外に絕倫無比の大改革、大整備、大發展をなしたるものにして、殊に內政の釐革、文化の攝取、異民族の包容、拓地植民及び韓國併合といへる吾人の謂ゆる五大綱目なるものは、古代王政の試みしものを更に擴充し宏弘し若くは顯揚したるものなれば、之を其の古へに稽へ、復古王政の事業として殊に注意を要する所なり

吾人の本論を草せし微意は畢竟古代の王政と復古の皇政とを對照して其の由來及び淵源の遠く且深きを知らんと欲するが爲めに外ならず。併し乍ら其の謂ゆる五大綱目なるものも、今日に於ては猶完成の域に至れるにあらず、此内には更に改革を必要とするものあり、增減を要するものあり、之れより眞境に入らんとするものもあるを以て大正以降全力を擧げて上下交々その大成を計るに勗めざる可らず。文物典章燦然として如何にも文明國たるに耻ぢざるも、諸々の制度、諸々の施設、動もすれば則ち形式に失して實質の之れに伴はざる憾あるか如き、是等も今後黽勉して其の面目を一新するの必要あり。實にや我が日本國は大きくなれり、世界の一等國、文明國となれり、東洋無比の大帝國となれり、而して是れ僅々四十餘年間の皇政の賚物とすれば、其の雄風、其の偉觀、全く他に匹儔なき異常事に屬するも、併しそれ丈け猶ほ幼なき處あり、足らざる處あり、其の幼稚にして不足なるは則ち前途多望の證なりと雖も、今後は努めて之れが充足補修に精勵鋭意せざる可らず。實を云へば、一躍世界の大帝國と

なりし我が日本は、之が爲め非常なる責任を加重し來れる譯なるを以て、寸刻の油斷も安心も出來ず、今より一層の努力奮勵を要する次第なり。差當りて支那問題は我が帝國の運命を決すべき一大試金石たるべし。斯く攷へ來らば、我々は復古の皇政が古代の王政に比して著しく規模を雄大にし範圍と實質を擴充せるに滿足せず、玆に謂ふ五大綱目の如きも益々之を宏弘し、發展し、充足し、進んでは猶その綱目を增加するの大決心大覺悟を要するや言ふ迄もなき事なり。

本文は先帝崩御の明治四十五年九月無限の哀愁と無量の感慨に打たれつゝ當時關係の滿洲日日新聞紙上に執筆掲載したるもの也、内に引用せし統計の如き陳腐に屬するものあるも故らに其儘となし置けり

大日本帝業の古今

結論

終

附錄

大正七年の植民地人口

本文『大日本帝業の古今』は明治天皇崩御の明治四十五年中に草せしものなれば多少今日と副はざるの言あり殊に第四章拓地植民中に掲げたる各植民地の人口數は餘りに古く今日はそれ以上に增加し而して南は南洋の赤道以北に委任統治國を得、山東省の一角青島を中心として邦人の發展見るべきものあり蒙古方面にも西伯利各州地方にも漸次國勢民力の發展を見んとしつゝあるは帝業の進歩として眞に喜ぶべき事に屬す茲に大正七年の植民地における內地人及び土着人の人口數を掲げて參考に供す

	內地人	土着人	計
臺灣	一四八、八三一	三、四九九、七〇六	三、六四八、五三七
朝鮮	三三六、八七二	一六、六九七、〇一七	一七、〇三三、八八九
關東州	一一二、七七二	六〇九、六五七	七二二、四二九
樺太	七七、五二九	二、一四六	七九、六七五
合計	六七六、〇〇四	二〇、八〇八、五二六	二一、四八四、五三〇

備考――關東州には滿鐵附屬地を含む

附說

我帝業と拓殖道

異民族に對する道

人口問題と拓地植民

滿鮮の關係と勢力の消長

北進の勢力と滿洲

第壹篇

我が帝業と拓殖道

「大正六年十一月發行の雜誌大陸に掲げたるもの」

大乘起信論義記の初頭に『夫眞心寥廓、絶言象於筌蹄、沖漠希夷、亡境智於能所』との語あり。我が皇道の偉、帝業の大は區々人智の測るべからざる所、即ち言語、筆舌、文字の上にあるを以て、野人の分際を顧みずして之を思議するの畏れ多きこと固より言を俟たざるも、今窃かに此の偉大なる皇道と帝業の御趣旨を拜察するに、そは民を愛しみ、民の心を心とし、民を本として八紘を蓋ひ六合を包める大德澤を四疆に洽ねからしむるの一點に歸着すべしと信じ奉らざるを得ず。眞に是れデモクラシーの極致なり。覇者時に權を弄し、强者時に私を營み、天日爲めに闇かりし事ありと雖も歷朝常に民と其の心を一にするを以て皇道の本義となし給ひし事、二千五百有餘年の

歴史之れを證して餘りあり。此の思量以上、測知以上の我か皇道の偉と帝業の大とは則ち我が帝國をして世界無比の國體を形成せしめ、其の歴史は古きも其の生命は新らしく、絶へず諸種の文化を攝取し、融合し、統一し、而して内に外に益々其の大をなしつゝある所以ならずんばあらず。開國進取の國是も歸する所は此の偉なる皇道と大なる帝業を祖述する所以に外ならずして、拓地植民の事業と雖も、其の根基は亦即ち茲にあらざる可らず。個人慾、英雄慾若くば國家的虚榮の爲めに他を征服し、侵略し併呑し、而して其の異民族を凌辱壓迫して以て足れりと爲すが如きは、固より斷じて我が皇道並に帝業の允さざるところ也。

明治天皇の御製『罪しあらば我をとかめよ天津神、民は我身の生みし子なれば』とは實に我が歴聖の斯民を愛撫し給へる大御心の僞りなき御發露にして、今上陛下が即位の大詔に於て『義は君臣にして情は即ち父子』と宣へる、洵に克く我が皇道の本義と我が國體の眞髄を洞破し給へる御諚と畏れ乍ら拜承せざるを得ず。君民一致は則

ち我が國體の精華にして、其處に神秘の力あり、天祐あり、約束あり、科學的智識を以て猥りに思議し得べきものにあらず。近頃頻りに『民本主義』又は『民衆主義』なるもの喧唱せらるゝも、義は君臣にして、情は父子の如き我が帝國は、元來が民本主義の國にして、高臺に炊煙を望んで民の殷賑を嘉し賜ひ、寒夜に御衣を脱して民の疾苦を驗したまへる明君子、聖天子のおはせしに徴するも、我が皇室が歴世斯民を本として萬事に行藏したまへること瞭然昭乎たり。唯その民本主義や、民衆主義や、神秘的、大乘的、大我的にして、他の科學的、小乘的、小我的なるとは大いに其の撰を異にするのみ。之れを是れ念はずして、他より輸入傳來せる主義、學說、理論を生囓りして虚無的、空想的、妄斷的なる主義學說を請賣的、流行的に振廻はすが如きは、危險實に焉より大なるはなし、思はざるべけんや。

偖て然らば我が拓殖道——予は茲に拓殖策と言はずして敢て拓殖道といふ、政策は時に變化すべきも、道は一貫して渝らざるものなれば也——も亦その歸する所は神秘

的、大乘的、大我的なる民本乃至民衆主義を土臺として化を垂れ、德を布き、地を開き、民を進むるに在ること、素より敢て疑を容るゝの餘地なし。世往々我が帝國を目して侵略的征服的野心國と做し、或は太閤の英雄的壯圖を引き、或は倭寇時代の浪人的所業を擬して以て其の例となす者あるも、此の如きは純碧大空に等しき我が帝業の上に浮べる一抹の雲翳にして、之を以て我が帝業の本領と認むるが如きは、誣妄の酷しきもの也。日獨戰爭は姑らく措き、日清役といひ、日露役といひ、皆是れ我が國家並びに國民の存亡安危に係はる問題を解決せんが爲めに已むを得ず拔き放ちたる日本刀なり。謂ゆる正當防衛の大なるもの也。我が武士道の本旨に照らすも意義極めて明晰なるもの也。而して其の結果、或は臺灣を領有し、或は韓國を併合し、或は樺太を回復し、或は關東州を租借し、北は滿蒙及び山東に伸び、南は南洋に進みつゝある所以のもの、征服、侵略、併呑の野心の致す所には非ずして、實に東洋の平和確保と其の文化的發達を期せんが爲めに外ならず。それ此くの如く日清、日露の二大戰役は正

當防衛の大なるものなるも、一は東洋の平和と文化の爲めに行はれしものなれば、我が國勢民力の自然的發展と共に、我帝國の東洋に對する責任は益々加重し來れる譯にて、之が爲めに自疆不息夙夜黽勉せざるを得ざる也。我が拓殖道の根義とする所、出發點とする所、亦自から爰に存する事推して以て知るべき也。

更に稍々詳しく之を叙べん乎、我が拓殖道は東洋の平和、文化並びに正義の爲めに與へられたる帝國の使命を全ふすべき所以の大義大道に外ならずして、同時に、神秘的、大乘的、大我的なる我が民本乃至民衆主義を基礎として、啻に我母國民の發展膨脹を圖るのみならず、子國民たり土着民たる異民族に對して敎化綏撫の實を擧げ、斯くして彌々倍々我が皇道の偉と帝業の大とを四疆に遍ねからしむるにあり。大義を四海に布くとは則ち此の事にして、我が帝業帝德の由來岳よりも高く海よりも深き所以のもの一にこゝに存す。臺灣、朝鮮、樺太乃至滿蒙の異民族は、今日のところ猶ほ我が固有の民族と一律に規し難きも、民を本として萬事に行藏し給へる我が皇道の大旨

は、是等異民族の上にも當然及ぶべき道理にして、固有民なるが故に特に愛撫し、異民族なるが故に特に虐遇すといふが如き事なく、此點は全く一視同仁ならざる可からず。古代王朝の行へる邊疆籌略を鑑みるに、一視同仁を旨として蝦夷、熊襲、隼人の各異種族を或は懷柔し或は徵肅し給へるが、明治維新後の今日、域外の地に對する我が拓殖道の本意も亦即ち此の如くならざる可らざる也。

特派使節として曩に石井大使の米國に赴くや、大使は我が帝國と米國との國際關係を述べたる後、東洋に對する帝國の使命に就て言及する所あり、而して其の旨とする所は米國と等しく平和、人道、正義にありと說きたりと傳へらる。支那に對する領土保全、門戶開放の主義は則ち此の抽象的理想と合致し、而かも我が帝國としては眞に此の主義を遵奉し、體現し、以て東洋の平和、文化、進步、向上の爲めに盡瘁せんことを期す。紐育ウオールト、紐育タイムス、其の他の米國新聞紙は此の石井大使の演說を以て東洋のモンロー主義を宣明せるものと見做し、競ふて種々の批評を下せるが

其の當否は姑らく措き、我が帝國が其の本來に於て平和、人道、正義を旨とし、征服併呑、侵略の禍心を包藏して他に臨むが如きこと是なきは、一貫せる歷史上の眞事實にして、必ずしも石井大使の言明を待つて後知るべきにあらず。

唯茲に一言せざるを得ざるは彼の軍國主義なるものに關する誤解なり。日本は元來尙武の國にして、日淸、日露の役は其の尙武力を對外的に最も遺憾なく發揮したるものなるも、而も戰はんが爲めに戰ひたるに非ず、喧嘩せんが爲めに喧嘩したるに非ず前段にも敍べたるが如く、實に是れ自衞と平和の爲めに騎虎の勢ひ止むを得ず起ちて干戈に訴へたる迄の事なり。此儀は當時煥發せられたる宣戰の詔勅に於て明らかに闡明しあり、而して我が皇道の偉と帝業の大とは亦寔に此の如くならざるを得ざりしなり。然るに日本の尙武國たるの故を以て、殊に日淸、日露の役に著しく其の武力を發揮したるの故を以て、又我が對支政策に多少の錯誤ありたるの故を以て、我が帝國を目して軍國主義一點張の國なるが如く邪推する者あるは、甚しき偏見誤解にして、昭

昭たる事實の上に故らに眼を覆ふ所の昧者の妄斷に外ならず。蒼穹に浮雲の飛ぶと同樣、我が帝業の上にも時としては雲翳の存することあるを否むべからずと雖も、蒼穹は蒼穹、浮雲は浮雲、其の浮雲を捉へて蒼穹の清を疑ふの癡なるを知らば、一二の空華に由て眞如を斷ずるの虛誕なるは言はずして明かなるべし。

若し夫れ軍國主義を以て宛ら惡魔の加く思惟する者あるに至つては、是れ又惑へるの甚しき者のみ。漫りに干戈を動かすの非なるは論を待たざるも、國際關係益々複雜を加へ來りて、此の間猶ほ種々の危險を包藏する今日、如何なる國と雖も自衛と平和の爲めに多少の軍備をなさざるを得ず。自國以外更に多くの責任を有する邦家に於ては一層軍備を張らざるを得ず。最近の歐洲戰爭は獨逸の軍國主義を打破するに在りと稱せられしも、斯く唱ふる英國の如きは元來海上の軍國主義國にして、陸軍も正規軍地方軍共に之を擴大し、頻りに他に向つて軍國主義呼はりをなす米國の如きも、戰後は海に陸に益々軍備を擴張し、事實上明かに一種の軍國主義國となれるに非ずや。我

が維新當時に日本の門戸を叩きて其の開國を迫りし米國の使節ペルリ提督は、軍艦を率ゐて堂々と乘込み來り、而も一方に於ては琉球か小笠原島かに軍艦の足溜場たる石炭貯藏地を獲得せんと目論見たるにあらずや。個人慾、英雄慾乃至國家的虛榮の爲めに軍備を張り、若しくば征服、併呑、侵略の野心の爲めに武備を整へ、而して鴟梟の群雀を襲ふが如く、機會ある毎に其の蠻力を弱小國に加へんとするの邦家あらば、开は固より排斥せざるべからざるも、自國と平和の爲めに軍備を爲すは固より國家必須の事務にして、之れを軍國主義なりと言はゞ、何れの國か軍備主義ならざるはなき也軍國主義の名稱の下に猥りに他を疑ひ他を誣るが如きは惑へるの甚しきものなり。我が帝國は眞に東洋の平和確保と文化の進歩を目的とす、而して此の目的に向ふ道程に障害物の横たはるあらば、斷乎之れを排して進まざるを得ず、是れ軍備の多々益々必要なる所以なり。若し之を以て全亞細亞主義又は東洋の新モンロー主義なりと言はんと欲する者あらば、唯其の言ふ所に任せて可なり。險夷原と胸中に滯らず、我れは只

皇道並に帝業を中心として坦々たる大路を進み行くべきのみ。

帝業の據る所既に此の如し、我が拓植道も亦即ち之に率由すべきは言を待たず。薫蕕良匪の別を明かにし、匪徒は即ち膺懲し、良民は則ち撫育し、以て恩威並行の實を擧げざる可らずとせば、一方に於て警備を嚴にするも亦當然の措置なり。而も其の根源は一に愛のみ、仁のみ、時に打ち時に撫づるは手段の差に過ぎず。斯くして異民族を敎化し、綏撫し、地を開くと共に人を啓き、以て我が皇化を四疆に洽ねからしむるは、啻に官人の任務のみにあらず、忠良なる我が六千萬臣民の齎しく其の步調を一にして進むべき大道なり。誅求や、掠奪や、壓迫や、欺罔や、斷じて爲す可らず。之と共に、我が國民は今少しく世界の大勢と東亞の事情を眞面目に研究し、其の眞相の探査に努め、具體的に實際的に我が皇道の發揚實現に勵まざるべからず。皇道の偉と帝業の大とは大空のそれの如く元是れ昭々乎たり、唯臣民の義務として萬事に公明正大を旨とし、努めて雲翳なからんことを期すべきのみ。

第貳篇

異民族に對する道

「大正六年一月發行の雜誌大陸に揭げたるもの」

民族といふ稱呼は獨逸語の『フォルク』よりも英語の『ネーション』を以て當れりとすべき乎。民族の上に更に人種なる者ありて、其の人種別と共に民族別の極めて複雜なる事、寧ろ驚くべきものあり。「チュートン」稱に樣々の分派あるが如く「スラーブ」にも、「ゼルマン」にも、「ラテン」にも、「アングロザクソン」にも、「アリヤン」にも、夫々分岐のあるありて、其處に多くの民族別を生じ、人種を一にするも民族を一にせざる結果、往々にして厭ふべき事端の發生を見るに至る。前古未曾有と稱せらるゝ此次の歐洲戰爭か其端を民族的紛爭に發せりと言はるゝ所以のもの、人種民族の異別と之より生する諸種の問題に徵する時は、何人も其の決して偶然にあらざるを認

むるに難からざるべし。實に近代は民族競爭の世の中なり。

茲に於て乎、人種民族の異別と其の歴史的由來又は關係てふことは、必すしも人類學、人種學を專攻とする學者の研究事項のみにあらずして、政府としても、國民としても、亦大いに考慮を要するものたるを知らざる可らず。殊に統一せる民族より成る國家の如きは、異れる他の民族に向つて、絶えず周到なる注意を拂ひ、而して之れに對する適當の政策手段を定むるの必要あり。謂ふ所の統一せる民族は血統、歴史、文化、宗教、言語、習慣、感情等の大體一致せるものを指しての謂なれば、同し東洋民族にても、黄色人種にても、そこに自から異なる所なきを得ずして、其の相同じきものより其の相異なれる者に向つて異民族の名を用ふるは、勢ひ避くべからざる事に屬す。即ち大和民族てふ吾々日本國民の立場より言へば、支那人も、印度人も、蒙古人も、西藏人も、皆謂ふ所の異民族なるが、今や帝國の世界的發展と共に、是等異民族に對する研究及ひ對策は益々急を告げ來れり。

我が帝國は既に臺灣の漢人種と朝鮮の朝鮮人とを新附の民となし、臺灣の東部半面に棲息する固有生蕃人、北海道に於ける古の蝦夷族たるアイヌ族、琉球人、南洋土人の一部、千島より樺太に亘りて殘存せる半開人を包容せるが、更に嚴密にいへば、現在我が帝國の版圖内に在る種族は、本來の日本民族の外、アイヌ族、琉球人、千島土人、小笠原島に居住する歐羅巴系統の人種、閩族と粤族とより成る臺灣人、アタイアル、ウオヌム、プユマ、ツアリセン、ツオオ、バイワン、アミス、サイセット、ヤアミ等の臺灣蕃人、樺太アイヌ、オロッコ、ツングース、ギリヤック、朝鮮人及び南洋土人の十二種となすを得べし。然るに、時運の進轉と帝國國運の隆興とは、是等多くの人種民族を帝國の版圖に收容せる以外、更に進んで他の多くの東洋人種をも包容、教化乃至同化せざる可らざる趨勢を馴致し來れり。大亞細亞主義が、東洋モンロー主義か、其等は今吾人の言ふべき限にあらざるも、印度人は姑く措き、吾々と同じ東洋民族にして又黄色人種たる滿漢人又は蒙古人の如きは、我が帝國に於て之が對策を回

避せんとするも能はざる自然的約束の下に置かれつゝあり。

東洋民族の多種多樣なることは、帝國版圖内の種族の多々なるに徵しても明白なるが、單に支那人に就いて看るも、其の種別は區々に渉り居れり。謂ゆる五族と稱して支那人は普通に漢人、滿洲人、蒙古人、回々人及び西藏人等より成るとせらるゝも、同じ漢人種にても、南支のものと北支のものとは歷史的、地理的、其他諸種の事情に依りて一樣ならず、言語も風俗も隨つて異なり、又等しく南漢人にても、閩族と粵族との如き著しき差違を有する者もあり、滿、蒙、西、回々人と雖も亦然らざるはなし即ち滿人にも純粹のツングース族と全く漢人化せる者とあり、蒙人の中にも東蒙古種と西蒙古種とは相同じからず、西藏族にも南部の固有土人と北部の唐古特と東部方面に散在する蕃子との別なり、回人も纏頭回と漢裝回とに別れ、更に南支方面に住する特別種族たる苗猺種に至りては苗子、猺、黎、畲、獠々、蠻子、摩叟等に區別せらるる杯、數ゐ立つれば殆ど際限なき有樣なり。去れば中華民國と名乘れる現在の支那が

五族共和と稱して其の一切の支那民族を統治せんとして而も其實の更に擧らざるも怪むに足らず。滿や、蒙や、西や、回や、其の多くは寧ろ支那に背けりと言ふも過言にあらざるべし。我が帝國は固有民族の統一と其の統一より生ずる結合力とを以て外に伸び、而して明治維新以來僅々四十餘年の間に約十二種の人種民族を其の版圖に收めたるが、支那は外來勢力の作用と民族自身の分解作用とに依りて從來包容せる數多の人種民族を次第に離散せしめんとしつゝあり。世界の古國たり東洋の舊文明國たる支那の衰へたる、此點より看るも怪むに足らず。其の衰運を挽回せんとして漢人種の漸く覺醒し發憤し來れるも亦異とすべきにあらざる也。趨勢既に斯くの如し、東洋民族の前途之より益々多事ならん事、推想に難からずと云ふべし。

然らば則ち我が帝國は如何にして此間に處すべき乎。既に多數の人種民族を包容し更に進んで一般東洋人種の爲めに盡さざるを得ざる運命と責務を荷へる以上、遠く其の將來を慮りて之が對策を樹つると共に、謂ゆる異民族に對する道に就いて國民の智

識と覺悟を促進するの必要あるや言ふ迄もなき也。人種民族の異同と其の競爭とが往往にして禍亂發生の因をなす事、這次の歐洲戰爭に徵するも明かなるが、米大陸、亞弗利加、濠洲、其他にも等しく人種民族の異別より生ずる軋轢紛爭の絶ねざるを察知し得べく、東洋に於ても亦然らざるを得ざるは理數の當然なり。同文同種、同根同源唇齒輔車などいふ常套辭に囚はるゝ事なく、我が日本帝國たるものは、今後少くとも支那を目標とせる對異民族策と其の方途を講ずるに努め、而して敢て遺漏なきを期せざるべからず。帝國の盛衰興亡、一に之に懸りて存す。

偖て然らば異民族に對する道とは抑如何なる事を意味するかと云ふに、他は知らず我が帝國としては古代歷朝の經紀し給へる懲肅懷柔、恩威併行、文武兼濟の遠大なる皇謨に則り、政府國民相共に之を心となし、從來内に施せるものを外に及ぼし、以て皇威を四疆に輝かし、皇化を僻陬に洽ねからしむるにあらざる可らず。斯るは何國にても爲す所なれど、英國が「タスマニア」土人に對して施せし主我的手段の如き、獨

逸帝國が波蘭人に臨みし壓迫主一の策の如き、佛國が印度支那に行ひたる極端なる同化政策の如き、而して之れより生ぜる各國民の倨傲暴戾を盡せる態度の如き、何れも一時的刹那的の小乘式權道にして、覇者の方便としては兎に角、天地を包み六合を蓋へる至大無極の我が皇道より見る時は、何等學ぶべき價値を有するものに非ず。横井小楠か『何止富國、何止强兵、布大義於四海而已』といひしは、毎度引用せらるゝ陳腐の語なるも、是れ我か蕩々坦々たる我が皇道の根義を闡明せるものにして、我帝國は此の如き大抱負大信念を以て異民族に對せざる可らず。

孟子が梁の惠王に見えて『王何必曰利、唯有仁義而已』と述べしは、人心維れ危く道心維れ微に、天下を擧げて生存問題の爲めに血眼となれる當節柄、別して今も猶ほ戰國時代と同樣なる刑罰主義、征服主義、誅求主義、之れに伴ふ權略主義やマキアベリズム流義の跋扈せる時代に於ては、何人も實際に迂き山林的賢者の世迷言として一笑に附するを常とせむ。吾人と雖も孟子の此語には割引を要するものと認むるも、而

も之を以て彼のトーマスムーアのユートピアと同視するは妥當ならず。何事にも拔目なき歐米人さへ動もすれば則ちヒユーマニチーを高唱する現代に於て、我れ獨り正直に實利主義を翳して肉迫突貫を他に試むるが如きは、愚にあらざれば則ち狂のみ。況んや我が皇道の根義炳として夫れ日星の如きものあるに於てをや。西班牙、葡萄牙、和蘭の通商的掠奪主義を以て他の民族に臨むべからざる事は、今日何人も承知し居る所なるべく、外面如菩薩、內心如夜叉と言ふが如く、禍心を包藏してのエゴイズムスを體能く異民族に應用せんとするが如きも、民族覺醒の當今に在りて、亦その不可能なることは、恐らく常識を具ふるものゝ敢て觀取するに難からざる所ならむ。鬼面他を脅すが如きは一時の權略にして永久不亡の長計に非ざる也。

人種民族の問題は、內に在りては社會政策となり、人口處理となり、ユーゼニックス又はラッセンヒゲネーに基底する人種改良となり、外に在りては自他の競爭となり軋轢、紛擾となり、竟には戰爭となるに至ると雖も、一貫の眞理は此の間にも猶ほ自

ら是あり。謂ゆる異民族に對する道とは、外に對する通商、貿易、產業、其他の諸般政策中の核心骨子にして、要は包容、敎化、進んでは同化を旨とす。貪るに非す、虐ぐるに非ず、利己主義のみにて利他主義を顧みざるの謂に非ず。時には風も吹くべく雨も降るべし、平和と文化の爲には劍を拔かざるを得ざる事もあるべし。去れど長安に達する大道は唯一路あるのみ。苟くも大義に仗りて大義と始終せば、蒸々たる巨多の人種、累々たる無數の民族、何ぞ克く我れに歸服せざるの理あらんや。前途悠久の業と云ふと雖も、苟も對異民族道にして過なくんば、東洋永遠の平和と東亞黃人國の文化とは之に依て保つべく、世界の大勢亦自から一變すべし。

佛敎にも衆生を利するに磐若の四枚あり、曰く布施、曰く愛語、曰く利行、曰く同事とあるが、是れ天下の大道にして又異民族に對する久遠不亡の妙諦なり。歐米諸國のものも基督敎を藉りて支那に布施、愛語、利行、同事を行ひつゝあり。固より大乘的ならざるも、爲すは爲さざるに優る。之が爲めに如何に支那の民心を收めつゝある

乎は、米人の支那における布教、醫療及ひ教育に就て支那人の信頼著しきに徴するも明白なり。「ロックフエラー」基金の醫療事業にして普及するの曉には、其の靈驗更に爍灼たるものあるべし。至大無極の皇道を根基とせる我が帝國の對異民道にして若も是等に及ばざりしとせば、而して唯利權を趁ひ實利を專らにすとせば、即ち如何。開拓の急先鋒は醜業者と賣藥商と高利貸とのみにて、而も一等國民を眞向より振翳し、他の民族との間に利爭、喧囂、軋轢、紛騷を是れ事とすとせば、則ち如何。資本と知識とを以て進めよ、科學的技術の應用を普ねからしめよ、而して未だ開かれざるの地を拓き、未だ表はれざるの富源を開けよ。併しながら之と同時に愛語と同事を行ふことを忘るゝ勿れ。利權を得て而して之を資本化し智識化するは、結果に於て自他互惠となるを以て、即ち布施ともなり利行ともなれど、單に夫のみにては不可なり。地を見て人を見さるは木を見て林を見ざるに等し。異民族に對する道とは、地と共に人を見、直間接に厥民を導き厥民を敎ふるの謂なり。吾人は我が政府が深く思ひを茲に致

さんことを望むと共に、我が國民、殊に海外の地に發展せる我が國民が、實際に處して克く其道を誤まらざらんことを祈願に堪へざる也。

帝國古代の皇政は異民族の討平綏撫、三韓との折衝、歸化人の同化、漢印兩土の文化攝取、內政の釐革を主要綱目とせるが、明治維新後の帝國は內政の刷新、歐米文化の吸取、國土及び民勢の膨脹、新領土の統治、異民族の包容及び敎化となりて、大いに其の範圍を擴充せり。島帝國の小日本は凭くして世界的大日本となり、東洋の盟主國となり、支那の混亂動搖と共に、東洋に對する責務愈々重大を加へ來れり。苟くも既に地を海外に占め、臺灣及び朝鮮を奄有し、滿蒙大陸に勢圏を進め、東洋の爲めに支那の支持援護をなさざるを得ざる以上、事の根本たる異民族道に就ては、官民相共に周到細微の注意を拂ひ、其の包容力を豐かにし、凡ゆる進步的施設を講じ、以て化を垂れ德を布き、苒々として皇化の四疆に洽ねからんことを期せざる可らず。語に曰く『人格は不滅にして永久の活力なり』と。何ぞ必ずしもミリタリズムと言はむ、此の

人格の力を基礎として國家的國民的に進むを對異民族道の要義となす。

第參篇

人口問題と拓地植民

「大正九年八月發行の雜誌大陸に掲げたるもの」

歐洲諸國は此次の戰爭によりて七百七十八萬人の壯丁を失ひ、また一千八百六十萬人の壯丁を不具者となし、戰前よりの女子過剩國がその結果として一層甚だしき女子過剩國となり、今日は如何にして人口を增加すべきかと其の手段工風に就いて苦心中であるが、東洋諸國は概して人口增加の趨勢を辿り、就中我が日本帝國は最も人口增加力に富める國柄である。日本も此の數年來出產率の減少を來たし。小兒の死亡率もまた多くなつたが、五十年前三千三百萬であつた人口が今や五千七百萬以上に達し、

而してその年增加數は三十萬、四十萬、五十萬、六十萬と逐次殖ゐる一方である。人口は減少するよりも增加する方が好いに違ひなく、それ丈け國力を强める事にもなるが、人口增加と國土及び食物との關係は大いに考慮を要する事であり、その增加が量の上のみであつて質の上に及ぼさず、寧ろその質を惡くする樣なことでは、決して慶すべき價値を有しない。是等の點から看て、人口增加國たる我が日本は果して如何なる狀態の下に在る乎、是れ玆に論究せんと欲する所である。

日本々部の面積は約二萬五千方里で、一方里の人口密度三百八十人餘、即ち極度の密集狀態にあり、而して農業も業に既に集約の極に達し、耕地の整理又は耕作法の改良等を以てするも、自から其の生產に限度あり、吾々の主食物たる米穀は之がために不足し、年々多少の外米を輸入するといふ有樣であつて、そこに明らかに人口と食物との不均衡を生じて居るのは、世間周知の事實である。大正四年乃至八年の五箇年間に於ける內地の一箇年平均米生產高は五千六百十餘石にして、之れに對する內地の米

消費高は六千三十五萬石、外國への輸出高五十萬石、朝鮮及び臺灣への移出高七萬石であるから、差引き四百八十二萬石の不足で、之より臺灣米及び朝鮮米の年移入高二百七十萬石を控除するも、結局二百十二萬石の生産不足となり、それ丈け外國米を輸入して居るのである。今之を十箇年平均にしたなら、外國米の年輸入高は恐らく百七八十萬石位のものだらうと思はれるが、何れにしても人口と食物との關係が著るしく平衡を失して居ることは事實上頗る明白なる事である。

此の不均衡を如何せば可ならん乎といふに、それは一面米以外の代用食物攝取又は雜食主義を行ひ、一面國勢民力を成べく海外に發展せしむるより外に妙計がない。曩に親しく日本を視察した米國のヴァンダーリップ氏は『五千七百萬の人口と年六十萬の人口增加とは所謂日本問題の核心を形造るものなり』と言つたが、全くその通りで我國が一意海外に發展せんとするは、軍國主義の爲にもあらず、領土侵略の野心あるが爲にもあらず、實に人口問題を核心としての已み難き必至の勢である。然らば日本

人の海外發展は如何なる狀態であるかと云へば、布哇、比律賓、玖馬、北米加州其他の米國、墨西哥、伯剌西爾、秘露その外到るところに移民し、熱帶寒帶の孰れを問はず發展して居るが、その數は未だ六十萬に達せず、猶ほ朝鮮に三十三萬六千八百餘人臺灣に十四萬八千八百餘人、關東州に六萬餘人、滿鐵附屬地に五萬二千餘人、樺太に七萬七千餘人、合計約六十七萬五千餘人（以上大正七年末調査）あるも、此の如きは人口增加の趨勢に比すれば寔に微々たるものである。

海外發展の急務なる我國にして其の發展力の猶ほ爾く不十分なるは何故であらう乎是には二つの事由がある。一は我が海外移民に對する北米加州、加奈陀、濠洲等の排斥、他の一は新領土、植民地、特殊地域又は勢力範圍における土着民族の多數と是等土着民に主として勞力を仰ぐといふ事、それが事由であり、同時に障害である。北米その他への我が移民は勤勉力に富み且賃銀の安いが爲めに白人勞働者の反感と排斥を蒙り、臺鮮滿等の植民地又は特殊地域に於ては我よりも勞力あり且勞銀の廉い土着民

多きが爲めに勞働者としての我國民の發展意の如くならず、どちら向ひても支障だらけと云ふ事になり、殆ど八方塞がりの觀を呈して居る。排日熱の最も激しいのは北米加州で、彼の峻烈なる土地法案の成立を見るに至らば、同地における八萬七千二百餘の日本人は全然その生活の根抵を覆へされ、日本人の所有する六十二萬三千七百五十二エーカーの土地と之れより收むるところの六千七百萬弗の生產物とは殆ど一定に歸する譯である。加奈陀に於ても、濠洲においても、益々障壁を高うして『日本人入るべからず』の制札を建てゝ居るから、なか〳〵思ふやうな發展は能きない。南米のブラジル、アルゼンチン、ペリウ及び墨西哥などは比較的發展し易いやうだが、元々他の領土であるから、之とて安心は能きない。蘭領瓜哇には發展の餘地があるさうだが、日本人はまだ餘り多く往つて居ないやうだ。濠洲は頻りに『白人濠洲』を主張して居る。彼等が日本人を排斥するは、人種的偏見の致すところもあるが、一は日本人の增殖力の旺盛なることゝ其の勤勉力と賃金の比較的低廉にして對抗し難きことに因るべ

く、寧ろ一種の恐怖心に基づくものと謂つて然るべきやうに思はれる。尤も或る一部には、雜草は蔓延し、下等動物は繁殖力强し、日本人の繁殖力に富むは則ち野生的なるが故なりなどいふ意見を抱いて居るものもある相である。

第二の障害もちよつと難物である。朝鮮には一千六百六十九萬七千餘、臺灣には三百四十九萬九千七百餘、關東州には五十二萬三千百餘、滿鐵附屬地には八萬六千五百餘、樺太には二千百餘、合計二千八十萬八千五百餘の土着民があり、此中內地人よりも土着民の少ないのは樺太ばかりで、他は何れも土着民の方が多く、關東州及び滿鐵附屬地以外の南北滿洲や蒙古には支那の漢民族が非常に饒多で、勞力は多く之に依ることゝなつて居り、臺灣も福建、廣東方面よりの去來民が多く、同じく勞力を主として彼等に仰いで居るから、どうしても日本人の思はしき發展が出來難いことになつて居る。されば臺灣に於ても、朝鮮に於ても、關東州及び滿鐵附屬地に於ても、今日の我移住者は官公吏、諸會社及び銀行員、卽ち勤め人が多數を占め、商工移民に偏して

農業移民は振はず、それ丈け去來出入常なしといふ狀態で、永住土着的のものは餘り多からず、隨つて亦それが發展の微々たる一原因となつて居る。上記の臺鮮滿等における邦人の數は大正七年末の調査によつたもので、今日はそれよりも增加して居るに相違なく、今後も年々多少の增加を見ることであらうとは思ふけれど、要するに何處においても決して滿足の狀態にあるものとは言へない。

國民の海外發展は此の如く思はしくないが、思はしくないからと云つて、我が國運民命に係はる一大事である以上、徒らに悲觀したり絕望したりしてはならぬ。凡有障害を排して飽まで猛進せねばならぬ。幸ひ滿洲、蒙古、西伯利の如き我國との接壤的大陸地方が開展し來れる今日ゆゑ、成べく此の方面に我國民を發展せしめ、地を拓き產を殖し、以て拓地植民の實を擧ぐるに努めたならば、そこに軈て人口對食物の問題を解決することが能きやうと思はれる。或人は是等の大陸地方を原料の大生產地となし、一方日本の教育を數學理化學に傾注し、大陸よりの原料を集約的に加工し、廉く

早く製造し、之を世界人口の半數を有し而も近隣に在る亞細亞方面に向けて溢出せしむる、卽ち接壤せる大陸を生產地、日本を加工地、亞細亞方面を市場とする三角法的經濟策を行ふならば、人口對食物問題の解決は勿論、依て以て大いに我國力を進暢するを得べしと說いて居る。道理ある說である。併し絕對的に大陸地方を生產地と限る必要もあるまじく、之を滿洲に就ていへば、商工都市たる大連又は奉天において其の地方の生產にかゝる物品を加工製造し、亞細亞は勿論、歐米にも輸出して然るべき筈で、現に滿洲農產物の大宗たる大豆は豆粕又は豆油として各方面に輸出されて居る。之を支那本部に就いて看るも、支那を原料地、日本を加工地として足れりとする時代は既に過ぎ去り、紡績業の如きは棉花の產地たる支那大陸の一角、例へば上海なり青島なりへ進み入つて、そこで企業する樣になつて來た。是には多少の危險が伴ふけれども、運賃其他の關係上有利であり、幼稚なる支那の工業も英米人の援助や支那人の自覺によりて次第に進步しつゝあるから、是非さう云ふことにしなければならぬので

ある。蠶糸業も米國人の熱心なる援助によりて支那に勃興せんとし、一般工業も多少進みつゝあるから、決して油斷は能きない。此等の事から推考して看ても、大陸地方を純生産地と限らず、一面その生産物を其地に於て加工製造し、さうして之を他に輸出するやうに工風せねばならぬ。海外の投資企業は實に我國當今の急務である。拓地植民の實も此くの如くにして始めて全きを得るであらう。

西伯利は地廣く人寡く農産物、鑛産物、林産物、其他種々の富源を包藏して居るから好個の拓殖地であるが、玆には專ら滿蒙大陸のことを述ぶることにする。滿蒙大陸は言ふ迄もない東洋有數の大農業地で、其の廣袤約七萬四千餘方里、即ち我が日本本土の約三倍强の地積を有し、而して其の開墾地域は全地積の約一割卽ち一千二百萬町歩に過ぎず。之を內譯にすれば、奉天省が二割一歩、吉林省が一割六歩、內蒙古が一割、北部黑龍江省に至ては僅に三歩、年々二三十萬町歩の開墾を見るも、概算して猶ほ開墾し得べき剩餘地が全面積の約二割八歩位に當つて居る。人口は最近の調査で二

千六百五十四萬、一箇年に平均五十一萬人の增加を見、その一平方里の人口密度は三十餘人、南方は濃く、北方は薄く、殆んど無人の境に等しい處もある。拓殖地として如何に發展の餘地多きかを察すべきではあるまい乎。農産物は高粱、粟、大豆、玉蜀黍、小麥といふ順序で、甜菜、亞麻、甘草等の栽培にも適し、米も朝鮮人の移住によりて其の産額を增加し、現に各地に水田事業の勃興を見るといふ狀態である。在來農作物も種子、栽培、耕作法等の改良と共に十分增殖の見込がある。今日の粗農時代から精農時代に進めば農産物は慥かに增加する。又畜産にも富み、緬羊及び山羊は奉天吉林、黑龍江三省と東蒙古とにて其の頭數二百六七十萬頭に上るべしと云はれ、牛、馬、豚等の家畜も多く、牧畜地としても前途頗る有望である。即ち滿蒙大陸はどこから觀ても拓地植民には最も誂ひ向きの申分なき適地であると云へる。

人口對食物の問題に苦みつゝある我が日本が旣に此の如き有望なる大農産地を特殊地域となす以上、支那政府及び支那人との關係上種々の面倒があり、現に土地商租の

如き難問題もあり、門戸開放、機會均等の下に他國人の投資企業を拒むことも能きず米國の東洋政策は滿蒙にも手を伸ばさうとして居るし、何かと煩累が多いが、それ丈け一層此の方面の拓地植民に鋭意せねばならぬ。滿蒙開發なるものは文化的であると共に經濟的であらねばならぬ。文化的將た經濟的に進むべきである。農業移民は極めて不振であるが、それは土着民の多いのと水田事業の多くが主として移住朝鮮人に據るのを利便とするからで、洵に是非もなき事ながら、是れも出來るだけは努力すべきものと考へられる。此の方面より米が穫れて日本內地に仕向けられる樣になれば、臺灣米、朝鮮米と相俟つて內地の食糧問題を解決する鑰ともなるべく、羊毛事業が物になれば、之が爲めに毛織自給の域にも進むべく、總て是等の點より見て、滿蒙大陸の開發は實に重大なる意義を有して居る。人口對食物の問題は先づ滿蒙において解決すべきものであると云つても敢て過言ではないのである。

飜て人口問題の趨勢を觀るに我國にも甚だ憂ふべき現象が顯はれて來た。歐洲諸國

は戰後著しく人口を減少し、人口減退國たる佛蘭西の如きは最も甚だしく、而かも女子の過剩と婦人職業の增加とは必然的に女子の獨身者を多くし、避姙墮胎などの弊風も行はれて、益々人口減退の勢ひを煽り、和蘭には新マルサス主義といへる一種の人口制限が公然と行はれて居るやうな始末である。戰爭は婦人をして結婚の神聖を侮蔑し、母親の義務を無視し、獨往獨來、唯本能の欲する所を逞うせしむるに至れりとの說もある位で、或人は之を『種族的自殺』と呼んで居る。日本にも避姙又は墮胎は昔から或る地方に行はれて居たのであるが、近來は一層それが烈しくなつた樣であり、新マルサス主義なるものも歡迎され、上流の家庭ほど、學問をした婦人ほど、結婚を忌み出產を厭ふといふ傾向が見ゐて來た。我國は人口過剩國で、既に本國生產の食物と人口との上に平衡を失ひ、現に之が爲めに苦しんで居るのだから、此位な事が行はれても差支ない、寧ろそれに依つて調節が保たれる、と云ふ意見もあるらしいが、日本も出產率減少、殊に幼兒の死亡率が高まつて來るといふ狀態であるから、無理な事

をして人爲的に強いて人口を制限するのは喜ふべき事でない。他國の排斥や故障に遇つて意氣銷沈し、さうして消極的に人口を制限しやうとするが如きは、最も喜ぶべからざる事で、左樣なことでは、我が國運の隆興と國勢の進暢を圖らんとするも得べからずである。日本は是より益々海外發展の大策を樹て、一意之れに猛進すべく、消極的に小さく堅まらうとするが如きは宜しくない。

だが爰に一つ注意したいのは人種改良の目的よりする人口の處理である。ユーゼニックス又はラッセンヒゲネーなどの學說に依據するところの人種改良なるものは、大いに理由のある事で、これは先天的痴呆者、先天的犯罪者、アルコール中毒者、肺病患者、癩病患者、癲癇病者其他治療の見込なき此類の遺傳病患者に强制力を以てその結婚を禁止し、斯くして劣惡分子を淘汰し、優良分子を多くし、以て人種民族の質を良くしやうと云ふのであるから、其の趣旨目的や甚だ善なりと謂はねばならぬ。いつも日本人排斥に騷いでゐる北米加州にては先天的痴呆者と酒精中毒者とに對して結婚

を禁止するの法律を實施し、ニウインデアに於ては之に癲癇病者を加へ、ペンシルヴアニア又はオレゴン州等にも之れと略同樣の法律が布かれて居るさうだ。如何に人口が殖ゑても質が惡くなつては仕方がない。事實また人口增加は其量を多くして其質を惡くするといふ傾きがあるから、我國の如き人口過剩國においては、國民の海外發展を策すると共に、一面劣惡分子の淘汰改鑄をなして我が國民を益々優良ならしむべく努むる必要があらう。然らずんば、其の人口增加は却つて將來我國の憂患となるかも知れない。政府は近く少年法を實施し又矯正院を設くるさうだが、今後は人種改良の上にも相當の手段を講じ、感化院その他の社會的施設にも意を用ひ、我が日本國民をして量に優り質に劣るといふが如き不結果に陷らしめぬやう十二分の注意を加へたいものである。日本には二十餘萬人からの低能兒があつて其の感化敎育が等閑に附されて居るやうだが、さう云ふことでは可けない。此邊の事は何と云つても北米合衆國が一番行屆いてゐる、即ち國費一千萬弗を投じたる國立收容所が十三箇所もあつて四萬

人からの低能兒を感化教育して居るさうだ。人口問題に就ては他の一面において斯うした種々の社會的施設を萬遍なく行ふ必要があるのである。

之を要するに、人口問題は之を有意義に解決すべく、決して無意義に解決してはならぬ。量多くして質劣ると認めたならば、人種民族改良の見地よりして、不具者、惡質者、即ち謂ふ所の劣惡分子の淘汰をなし、猶ほ種々の社會的施設を講ずべしであるが、人口過剰に困惑して人爲的に無理な人口制限を行ふが如きは戒むべき事である。凭る惡風潮は斷然防止せねばならぬ。デモクラシーの聲に伴れて民族間に内訌と紛擾を滋くするが如きも避くべき事である、而して一方に益々國勢民力を海外に發展し、差當りては東洋有數の大農產地たる滿蒙大陸に拓地植民の實を擧げ、文化的將た經濟的に着々事の進歩を策さねばならぬ。我が國策の大本茲にありと云ふも敢て過言ではない。排日を能事とするものは之を能事とせよ、人種的偏見や妙な恐怖心に驅られて我國民の發展を阻まうとする者は之を阻めよ、日本は日本として飽まで正路を踏んで

海外發展の上に意義ある活動を續け行くべきでる。

英人ゼー、ヱー、ピー、ブランド氏は「極東の諸問題」と題して其中に左の如き說をして居る。最後の一言は少しく妙に聞こるが、大體において此說は日本の立場を諒解したものと認めねばならぬ。本文と自から關係するところあるを以て茲に此說を引用す。

『日本が侵略主義、軍國主義を採つて居ると云ふ非難は主として日本政府の支那に對する政策を見て立てた議論である。併しながら斯く日本を非難する者は、宜しく日本の遭遇して居る絕大なる經濟的壓迫を勘定に入れなければならぬ。然る時、彼等は日本の政治に愛他心がないとか、崇高なる理想が缺けて居るとか云ふ批難が少しく酷に失する事を發見するであらう。一國民が單に領土慾に驅られて他國に侵入するのと、單に生存の爲め呼吸の爲めに外國に流れ込むのとは、形式は一寸似て居るが內容は非常に異なつて居る。後者は要するに自然の第一原則であつて、人類が發生して以來常に强健なる國民の實行した事である。此點に於て日本を批難するものは、決して當れりと云ふ事が出來ぬ。或る日本人は余に向つて云つた『日本國民は

食はずして聖者の飢死を待つか、或は隣家の福園に侵入するか、何れかその一を取らなければならぬ、然して日本國民は必らずしも聖人の集團ではない』と。此れは日本當面の問題を最も簡潔に云ひ現はしたものである。

日本における當面の問題は實に簡單明瞭である。即ち既に其の國土が支ゑ切れぬ、大なる人口に對して如何にして食料を供給するかにある。海外移住を奬勵し、國内の人口を稀薄にする事は、無論一つの方法であるに相違ないが、英國は人口の最も稀薄な濠洲や亞米利加植民地から、日本人を排斥して居る。是れでは日本人は移住するにも移住すべき場所がない。今回の世界戰爭は要するに地球上の人口と其の產出する食料との釣合の取れないことが根本的原因であつたのであるが、此の人口對食物の釣合は日本において最も甚だしいのである。

日本は千人につき二十一人半の死亡率を有し、然して死亡一千人の内二百六十人は一歲以下の小兒である。斯るは畢竟日本が如何に食料に缺乏して居るかを證據立てるものである。今日本が如何に困難の立場にあるかを見ると大要下の如きものである。(一)日本の出產率は一千人につき凡そ三十二人、人口の增加は一年平均七十五萬人である。(二)過去十年間において日本本部の人口は五千萬人から五千七百萬人に增加し、一平方哩三百八十人平均となつた。(三)而して同じく過去十年間における既耕地面積は五分の增加で、米の收穫は四分だけ增加したに過ぎない。然るに此の間において人口は一割二分も增して居るのである。

即ち人口が現在通りに增加を繼續するとすれば、日本に他の食料を輸入する事は年年增加せなければならぬ結論になる。日本では既耕地面積を加へる事も、生產率を增大する事も、今や殆ど望めない。凡らゆる谿間、凡らゆる山側は開拓され、殆ど信ずべからざる勞力を以て辛ふじて收獲を得て居る。此の上開拓すべき餘地は到底無い。支那では墓地の爲め、肥沃なる土地を潰して居るが、日本では斯んな贅澤な事は出來ない。日本は今や食料に關しては殆んど身動きの出來ない狀態にある。日

本が海外貿易に成功し、輸出超過を樂しむ場合には、必要なる食料を海外から買入れても差支へない譯であるが、併し乍ら競爭者の多い海外貿易に日本が常に輸出超過を持續せんことは困難である。そこで將來採るべき方法として、日本の政治家は(一)出產率の低減、(二)商工業を盛んならしむる事、(三)亞細亞人種の人口稀薄なる部分に向つて發展する事の三を樹てる。三策の內、最後の二策が實行出來る以上は日本は決して第一策を取る者でない。何となれば第一策は日本の社會組織と人種的自覺とに對する革命的變更を意味する者であるからである。そこで日本の政治家は、後の二策を並行するか、或は其の一を實行せん事に考へつく。

以上述ふ所は日本が極東に於て動もすれば侵略的と思はるゝ行動に出づる所以である。だから日本の遭遇する困難を了解するものは、日本の行動を是認せない迄も、少くとも其說明は得られる。日本の外交、原料を獲んとする其の狂熱的熱心、滿洲蒙古、東部西伯利に於ける其の『特殊利權』の主張なんと云ふものは、要するに日

本が其の苦境より脫出せんとして悶えつゝあるものである。日本が人口過剩に苦しんで居る事は、在來の英國又は他國の如くにして、人口の捌き口を有せざるに於て英國若しくは他國と同じくない。日本移住民の爲には最早『新世界』は存在せないそこで日本の發展は最も抵抗の少ない方面に流れて行くことになる。抵抗の最も少ない方面とは、米大陸にあらず、濠洲にあらず、實に支那の領土で、北京政府とは極めて關係の散漫なる所である。換言すれば滿洲と蒙古とは朝鮮の運命に倣ひ所謂地理的重心の働らく範圍內に入つて來はしないかと思はれる。

第四編

滿鮮の關係と勢力の消長

大正八年六月十三日大連ヤマトホテルに於て朝鮮に緣故又は關係を有するもの約五十名集まり懇親會を開き席上種々の卓上演說ありたるが本文は其折予のなせる卓上演說に修補を加へたるものなり

第四篇　滿鮮の關係と勢力の消長

滿洲と朝鮮との關係の深いことは、今更申す迄もない周知の事實で、それは昔からさうで有つたのだが、其の關係の根抵は近代に至つて一變した。どう云ふ風に一變したかと云ふと、十數年前までは滿洲より朝鮮へと滿洲が能動的で朝鮮が被動的であつたのが、今日は朝鮮より滿洲へと朝鮮が能動的で滿洲が被動的といふ事になつた。滿鐵が朝鮮鐵道を經營する樣になつて、滿洲からも無論働らき掛けては居るが、大體の勢は朝鮮より滿洲へといふ風になつて、昔とは其の勢の動き方がまるで變つた。隨つて滿洲と朝鮮との關係も昔と今とは全くその趣を異にして居る。朝鮮が能動的で滿洲が被動的だと云ふと、何だか朝鮮の方が强く滿洲の方が弱いやうに思はれるかも知れないが、さう云ふ意味ではなく、是れは勢の動き方をいつたもので、ツマリ日本の勢力が朝鮮を經て滿洲に働らく樣になつたと云ふのである。

地圖を案ずる迄もなく、朝鮮の地勢は北は滿洲に接し、西は渤海及び黃海を隔てゝ支那本部に面し、南は對馬海峽を挾んで日本に對して居る。それ故、人種の移往來往

も、文化の輸入も、此の北、西、南の三方より行はれ、而して朝鮮半島は近代まで此の三方面よりの勢力の消長地であつた。勢力の消長地ではあつたが、大體に於ては北よりせし勢力が一番優勢であつた。今こゝで管々しく古い歷史のことを繰返へすのは煩に堪へないが、北よりの勢力が優勢であつたと云ふことを證明する爲めには、ザツと歷史のことを語る必要がある。暫くの間それを聽いて戴きたい。

檀君の事、箕子の事は、諸君も御承知の通り、餘りに茫漠として居て捉まへ處がない。平壤には箕子の陵や箕子の井田の跡などがあつて、箕子が平壤に來たと云はれて居るが、それは信ずるに足るべき說でない。箕子朝鮮とは遼東一帶の地を指したもので、朝鮮半島ではないと云ふ學者の說、それが眞實らしく思はれる。しかし其の當時は遼東より平安道及び黃海道方面へかけて北の勢力が振つたのであるから、此の一帶の地を朝鮮といつた處で、別に不思議とするに足らず、そこに古くから滿洲との關係か濃厚であつたといふ事が窺ひ知られるのである。それより數百年の後、箕子の子孫

箕準が鴨綠江を渡つて平壤に進み入つたのは事實だが、準は燕人衞滿の爲めに逐はれ衞滿代りて王となり、王險即ち今の平壤に都し、王險城を築いたとある。此くの如く朝鮮半島の一部は古代より北の勢力に支配されて居たのである。それから漢の武帝が樂浪、臨屯、玄兎、眞蕃の四郡を置いたのは、ヤハリ遼東の地を間屬せしめて餘威半島の一角に及んだもので、西より北、北より南へといふ勢力の動き方と見て然るべきであらうと思ふ。次いで三韓時代、即ち馬韓（マハン）、辰韓（チンハン）、卞韓（ヒョンハン）となつてから、馬は京畿道と忠淸、全羅の南北を支配し、辰は慶尙南北道の東北部を握り、卞は同じく慶尙南北道の西南部を保ち、西と南と東に分れて盛んに勢力爭ひを行つた。此の三韓時代には我邦との關係が繫がり、その關係の結果、自然南よりせる勢力も南部朝鮮に及んだ譯だが、馬、辰、卞の三族は何れも大陸民族で、辰韓は秦の亡民、卞韓は山東省の移住民だといふ事であるから、此の傳說史記を事實であるとするならば、三韓時代は主として西の勢力が韓半島を支配したものと謂はねばならぬ。

更に其後の三國分立時代、即ち高麗、百濟、新羅の角逐時代から新羅統一時代、それから高勾麗擡頭時代までの間を攷へて見るに、此の時代も大體に於てヤハリ北と西との勢力が優勢であつたと言へるのである。當時日本は百濟を扶けて新羅を擊つたが元來新羅の王統は日本出雲族の血脈を有したものであると言はれ、新羅の舊史には倭人と交通云々のことが記されてあり、又彼の神功皇后の征討は百濟の近肖古王の時に行はれ、其後日本は加羅國即ち任那に府を置き重臣を駐劄せしめて諸事を統制したとあるから、南よりせる勢力は此の時代に益々朝鮮に伸びた譯だが、しかし北と西との勢力を驅逐することは出來なかつた。新羅統一時代には却つて退歩の形迹が見ゐ、次いで高勾麗擡頭時代となつて、更に北の勢力が優勢となつた。漢末扶餘族の勢威漸く振ひ國を建てゝ高勾麗と稱すと古史にある如く、高勾麗は扶餘族より成り、扶餘族は朝鮮咸鏡道より起つた民族だと言はれるが、當時は滿洲の一部に威力を張り、開原に都城を築き、遼東より漸次南下して朝鮮半島の北部を奄有するに至つたのである。次

いで隋唐の勢力南下となり、靺鞨族より成れる渤海國の出現となつて、形勢は多少變化したけれども、西と北との勢力は更らに強くなつた。

此間南よりせる日本の勢力はどうであつた乎といふと、景行帝の英略、神功皇后の雄圖などありて、南朝鮮の一部を風靡したが、天智帝大化の革新以降全くその勢威を失墜し、日本の植民は迎日灣、金海、其他慶尙南道沿岸の地に及びしものゝ、餘り大なるものでは無かつた。西北朝鮮の方へは頓と伸びなかつた。ズツと降つて文祿の役即ち豐太閤が明國を討つべく道を朝鮮に借りた時、元山より北の方にまで威武を輝かしたが、豐太閤の擧が英雄の刹那的壯圖として終りし爲め、單に威武を示した丈けであつて、根抵ある勢力の發展とはならなかつた。北又は西よりせる勢力に比すれば南よりせる勢力は微弱であつたと言へるのである。此の狀勢は暫らくの間繼續し、やがて李朝の太祖李成桂が北關より起つて半島を統一するや、國名を韓國と稱し、斯くて五百餘年の治を保つたが、李朝時代に於ても朝鮮は依然として西と北との勢力に支配

せられ、明の時代には明國に迎合し、清の時代には清國に阿附し、或は正朔を奉じ、或は貢物を納めなどして僅かに西北方の强壓力より免かるゝに努めた。此くの如きの結果は、清國をして竟に韓國をその屬邦視せしむるに至り、袁世凱の全權委員時代に至りて清國の對韓策は益々猛烈となつて來た。是れは西よりの勢力が殆んど韓半島を風靡した極度の時代である。之より先、日本は明治五年に征韓論を生せしも、廟議分裂して行れず、越へて明治八年には江華島事件あり、十五年には金玉均の亂あり、日清兩國の勢力即ち南と西との勢力之より漸く相容れず、明治十八年の天津條約に依つて一時を彌縫したものゝ、其後の清國の態度と韓國の措置とは、事毎に機宜を失し、竟に東學黨の內亂を惹起するに迨んで、明治二十七八年の日清戰爭を餘儀なくせしむるに至つた。其の結果西よりせる清國の勢力は半島より一掃された。

最近の事は別して諸君の熟知せらるゝ所なれば、一々例を擧げて申す迄もない事だが、西よりの勢力が全然排斥された後に今度は是迄とは全く毛色の變つた露國といふ

北よりの勢力が滿洲を通じて次第に韓國を壓して來た。露公使ウエーベル、同バウロフの如きは、袁世凱の格で盛んに韓國を脅威したものだ。斯くて明治三十七八年の日露戰爭となり、日本の力で此の北よりせる新勢力を驅逐したので、其後南よりの勢力が漸次半島に伸びる樣になり、日本と韓國との關係は次第に密接となり、斯くて日韓議定書の成立、財政顧問の設置より進んで統監府の設立となり、茲に韓國保護政の實施を看、更に進んで明治四十三年八月の韓國併合となつて、朝鮮は全く日本の新領土となり、勢力の消長始めて一段落を告げたが、之と同時に、南よりする日本の勢力は一面朝鮮を通じて滿洲に北進する樣になつたのである。

話は大摑みだが、大體以上の如き次第で、滿洲と朝鮮との關係は是まで北西方の南下、殊に北力の南下を土臺として居たところ、それが近代に至つてグワラリと變り、南勢力の北進となつて、其下に滿鮮兩地の關係が新たに結ばれる事になつた。是れは主として日本の國運隆興に基づくものであるのは言ふ迄もない事である。陸よりする

此の北進の勢力は、海よりする他の北進の勢力と相俟ち、現に朝鮮を通じて益々滿洲に伸びつゝあるが、之を滿洲に充實せしめ、牢乎として拔くべからざる實勢力たらしめ、更らに蒙古及び西伯利方面に進展せしめねばならぬ。大勢は實に斯くの如く動きつゝあるのである。朝鮮銀行や東拓會社の北進を始めとし、諸種の團體や個人の北進も、皆此の大勢の然らしむる所であつて、朝鮮人の滿洲移住も無意識とはいへ或る意味において又北進の大勢に順應したものと言へるかも知れぬ。

こゝに最も留意を要するは、我が北進の勢力が平和的、經濟的、將た文化的であつて武斷的、軍國的、侵略的でおつてはならぬと云ふことである。日清、日露の兩役は軍國的侵略的の武力作用ではなく、東洋の禍根を絕ち、東亞永遠の平和を維持せんが爲め、他の武斷的將た軍國的强壓力を排除したのであるから、眞に堂々たるもので、毫も不純分子を混へて居らぬ。既に此の如き武力作用によつて現はされたる北進の勢力である以上、その勢力の適用が飽くまで平和的、經濟的將た文化的であらねばなら

ぬのは、當然の歸趨であつて、此間何等の疑義を挾む餘地もないのである。近代まで朝鮮を高壓的に支配した北及び西の勢力は、大義を基とする我が北進の力の爲めに全く排擊せられ、而して其の西の勢力たる支那は、秕政百出、內亂外侮交々臻り、國勢益々振はず、北の新勢力たりし露國に至りては、邦家覆滅、全土崩壞して過激派の天下となり、往年の雄姿亦之を見るに由なき有樣となつたが、是れ畢竟するに餘りに武的、專制的、侵略的に振舞ひ過ぎた罪業の祟りと云ふべく、因果應報洵に是非もなき次第である。此前者の覆轍に鑑みる迄もなく、我が北進の勢力は飽くまで强く、飽くまで堅く、さうして又飽くまで正しくあらねばならぬのである。

それに就けても、新領土たる朝鮮の經營は今少しく進步的で有つて欲しいと思ふ。歷史の誨ゆる通り、朝鮮は北西南勢力の消長地であつて、李朝時代初めて大韓國と稱し獨立國の體裁を具へたとは申せ、その獨立は形式的のもので實質的のものではなく內部の黨爭と共に絕えず外來の勢力に左右され、又その勢力を藉りて僅かに自已の存

在を保つて來たのであつて、此の惡い癖が今に至るも拔けず、大正八年三月以後の騷擾事件の如きも、依他的事大思想の發現と認むべき點があるから、朝鮮經營には一段の注意を要するのである。私が始めて朝鮮に行つたのは明治四十年即ち韓國の光武十一年の海牙密使事件當時であるが、御承知の通り、此事件は西曆一千九百七年六月和蘭海牙に第二回萬國平和會議の開かれた時、李相窩、李儁、李瑋鍾などいふ鮮人が宮中の莢雜輩と呼應し、他の力を藉りて日本の勢力を半島より驅逐しやうと企てたもので、黑幕には米人ハルバート、英人ベッセル等ありて、盛んに暗中飛躍を試みたものである。斯うした陰謀は弱小國には免かれ難き病とは云へ、支那人にも朝鮮人にも此癖があつて、之が爲めに東洋に他の勢力の跋扈を助長せしむるは、平和及び文化のため寔に嘆かはしき事といふべく、寸時も油斷は出來ぬのである。

要するに滿洲と朝鮮の間柄は地理上、歷史上、極めて深い關係を有つて居るが、その關係の基調たる勢力の作用は全たく一變した。近代までは滿洲より働らき掛けて、西

北力殊に北力の南下といふ事になつて居たが、それが日本の崛起擡頭に因りて一變し今日はその正反對に南力の北進となり、日本の力が朝鮮を經て滿洲に働らく樣になり現に此の大勢は滿洲より蒙古及び西伯利方面にまで及ばんとして居る。他の勢力の消長地、角逐裡であつた朝鮮も、今は日本の新領土となり、日本と一つになつて、南力北進の重要なる中繼地となつたのであるが、前言の如く、朝鮮にはまだ安心の出來ぬことが多々あるから、此の大切なる中繼地に動搖を生せしめぬやう、我々は不斷の努力をなさねばならぬ。朝鮮に動搖を生ずればソレと關係の深い滿洲にも勢ひ影響なきを得ない。朝鮮の經營は朝鮮だけの事ではなく少くとも大陸滿蒙と相干するところ有るを知らねばならぬ。滿蒙經營も亦朝鮮經營と相俟つところ多かるべき筈である。總て此等の大局より打算して今後に處すべきであらうと思ふ。

處治世宜方、處亂世宜圓。處叔季之世當方圓並用　（洪自誠）

第五篇

北進の勢力と滿洲

「大正五年四月發行の雜誌大陸に掲げたるもの」

力の內部に充實せる時、その力は何等かの機會を藉りて必す外部に迸出す、湛へられたる水の溢れ、蓄へられたる氣の發するが如し。我か帝國が日清役によりて其の國力を先づ南に進め、日露役に依りて更に之を北に進めたるは、帝國の自衞と東洋の平和及ひ文化の爲め、他より來れる壓迫力を排除せる結果なるも、一は充實せる內部の力が此の機會を藉りて外部に溢出したるもの、言葉を換へて云へば、緊張せる國勢民力の自然的結果にして、此間何等の構造も細工も含まれ居らず。帝國の膨脹を目して併呑慾侵略慾より來れるものと爲すは誣ゆるも甚たし。

如何に日本を見縊るものと雖も、東洋において世界の文明國と雁行して耻ぢざるも

の獨り日本帝國あるのみなる事は、之を認容せざらんと欲するも能はざるべし。吾人は勿論帝國の現狀に滿足せず、內改むべきもの多く、外爲すべきこと亦多し。東洋においてこそ先進國なれ、之を歐米先進國に比すれば猶遙かに幼稚にして、政治に、經濟に、軍事に、學術に、其他總てに於て劣れり。乃ち夙夜黽勉して以て其の足らざるを補はざる可らずと雖も、帝國が東洋に於ける唯一の文明國たることは、兎も角も否むべからざる事實なり。東洋に國するもの、或は滅ひ或は衰へたる中にありて、獨り日本のみが隆興振起して止まざる所以のもの、淵源深く由來遠し、固より據る所なかる可らす。約して之を言はん乎、帝國の素質と其の民性とは他の文化を攝取して克く之を咀嚼融合し、更らに其の包容力と消化力とによりて常に國命を新にし元氣を鮮にす、而して其處に進歩あり、發展あり、是れ日本帝國の今日ある所以に外ならす。日本の力は斯くして寸時も衰へす、建國以來既に二千五百七十六年の星霜を閱せしも、青春の元氣常に燃ゑ、活力內に充實す。その力の溢れて外に迸り、一は南に進み、一

は北に進み、殆ど其の止まる所を知らさる、豈怪むに足らんや。

之を史に徵するに、昔は東洋の勢力主として北より東に向ひぬ、即ち大陸より半島へ半島より島國へと進み、島國たる日本は其力の集中地なりき。應仁の朝十五年に支那の典籍の入りしも、欽明朝十三年に印度の敎典の入りしも、皆是れ勢力の東進、文化の東漸を語るもの、此時印度と支那とは日本の先進國にして、朝鮮も或る點において優りたりき。此間種々の曲折ありしも、日本は不斷に他の長を採つて己れの短を補ひ、且その印度及び支那の文化に自己の血液を注入し、而して克く之を消化し融合せり。即ち佛敎も儒敎も總て之を日本化し、其の日本化によりて更に新たなる種々の文學、美術、制度を織り出し、中世南よりせる和蘭、葡萄牙の文化によりて益々同化の妙を發揮し、其內容と色彩を新たにせり。斯くして王政復古となり、維新改革の丕業成るや、更に泰西の新文明を輸入し、盛んに之を攝取し、未た融合同化の域に到達せざるも、之が爲めに國命を一新し面目を釐革せること國初以來未曾有といふも過言に

あらず。以上は何人も知るところの史實にして、帝國の今日ある所以のもの敢て怪むに足らず、力の內部に充實せる、亦固より其の所なり。

大陸より半島、半島より島國へと、嘗て勢力の東進を見たるものが、近世に至りて主客全く顚倒し、島國より半島、半島より大陸へと、現に勢力の北進を見つゝある所以のもの、之を要するに、東洋の諸國、殊に朝鮮亡び支那衰へたる中にありて、獨り日本のみが常に若々しく東洋日出國の元氣を以て向上進歩し來れる結果に外ならず。日本は既に印度及び支那の文化を採りて之を咀嚼消化し了せり。今後は現に攝取しつつある歐米の文化を融合大成し、而して之を力の外溢と共に他に頒たざる可らず。朝鮮を統治し、滿洲を開發し、支那と相提携して東洋問題の處理解決をなすは、天の日本帝國に下せる一大使命にして、之を新植民政策とも文化政策とも云ふ。北進の勢力は內部に充實せる組織的統一力の自然的發現なるも、之と共に、日本の東洋に對する使命と責任との極めて重大となれるを知らざるべからず。

日本の力は固より北にのみ進めるにあらず、慶長、萬曆、元和の頃、中國、九州を基地として琉球、南支那沿岸、臺灣、南洋諸島、暹羅、安南等にも其の一部的勢力は伸張したり。併し乍ら、是等の力は北に向ひし大閣の征韓役が英雄の刹那的壯擧として終りしが如く、國家的國民的ならざる處士浪人の一時的快擧に過きざりき。尤も寛永鎖國令の發布なかりせば、此力に根抵を加へて永續的連鎖的のものとなし、ゼーリング教授の言ひけん如く、今より二百餘年前、日本の勢力或はロッキー山以西に迄も進みたりしやも知るべからず。去れど今はそれを憾むも詮なし。日清役後、海よりせる此の南進力は、臺灣の領有と共に現實なる國家的國民的勢力となり、更らに南支那より南洋諸島へと現に益々南進しつゝあれば、今更深く往事を追究すべきに非す。此の南進の勢力を如何に擴大し具體化すべき乎は、大に研究を要する事なるも、そは別問題に屬するを以て、今こゝに之を說くの要なし。吾人の之れより言はんと欲する所のものは島國より半島、半島より大陸へと、最も現實的に北進しつゝある日本帝國の

勢力を如何に有能的に具象化すべき乎といふ一事にあり。

日本の北進力は、朝鮮半島を復活し啓沃すると共に、滿蒙大陸に日本の權威と文化を樹立せざる可らずして、自然の結果、その勢力を滿洲に集中し、凝成し、而して之を蒙古、進んでは西伯利にも及ほさゞる可らず。半島の開發は半ば既成的なるも、大陸開發は未成的なり、前途遼遠なり、それ丈け多くの工風努力を要す。此の漠々たる大平原地は、支那の獨力を以てしては之を開くに餘りに大なり。半島より大陸に向ひつゝある日本の北進力は、此の大平原地に新活力を注入し、新生命を寄與し、廢れたるを起し、隱れたるを顯はし、永らく荒頽に委棄せられたる此の地を化して一個の新文明境となし、先つ此の方面より東洋隆起の一端を開かんとするにあり。此事は現に行はれつゝあり。日本の活ける力が此の滿洲の野に入りてより、歲月を閱すること猶ほ十余年なるにも拘らず、交通、運輸、通信、金融、其他諸種の文明的機關の漸備と共に、勿論猶ほ不充分なるも、如何に面目を一新したる乎は、管々しくその項目を列

擧して說明する迄もなく、眼のあたり事實の明かに示す所にあらずや。清領時代の混沌たりし臺灣が日本領となりて善化し、殆ど亡國に瀕せし朝鮮が日本の手によりて救はれ、相共に益々東洋の新文明境となり、若くは成らんとしつゝあるが如く、滿洲も日本の爲めに次第に良化し善化しつゝあるは極めて明瞭なる事實なり。

滿洲の良化善化は日本の爲のみにあらず、支那の爲め、將た東洋の爲なり。此地の開かれつゝある結果、多少の弊も之れあるべしと雖も、大體において、日本人と共に支那人も其惠に浴し居るは、是又事實の明示する所なり。去れど、今日は我が北進の勢力猶ほ充分に集中し凝成せられざるが爲め、滿洲より蒙古及ひ西伯利方面に及ぼすべき天の日本に下せる一大使命、別語を以ていへば、文化主義、經濟主義を根抵とせる日本の拓地植民策は未だ普通的ならず、徹底的ならず、隨つて何となく間の拔けたる所あり。新植民政策若くは文化政策の意義を解せず、單に機械的物質方面にのみ走りて、刹那的我利的妄動を事とする者あるが如きも、事の徹底を缺く一因ならずとせ

ず。地を開くと共に人を啓けよ、此地の蒸々たる民衆に我皇の盛德と我國の誠意を體得せしむるにあらざれば、我が文化政策の目的は達せられず、此地に北進の勢力を集中し凝成せんこと、亦思ひも寄らず。是れ日本國民の深く慮らざる可らざる所にして同時にその文化政策の普及發展に一致努力せざる可らざる所以なり。

帝國を肇造し給へる神武天皇は、南の方日向より北進して大八洲を治め、都を大和の橿原に奠め給へり。爾後人皇五十餘代まで、南方隼人族の討平綏撫と共に歷朝の最も心を勞せしは北方蝦夷族の征討及ひ馴化にして、日本武尊の東夷征伐、天平九年の大討伐、坂上田村麿を征夷大將軍とせし延曆六年の役、皆その邊疆籌紀の爲にあらざるはなく、其の結果、日本の力は北海道より樺太まで進み、此の北進の力と南方の治と相待つて、民族の融化と國家の統一成りぬ。當今內部の緊張力が發して一は南に進み一は北に進みつゝあるは、即ち其形を大にしたるものとも謂ふべく、而して其の北進の勢力は朝鮮より滿洲に入り、滿洲において一先つ之を集中凝成し、一方滿鮮の共

通若しくは聯絡を圖り、他方更に進んで蒙古、進んでは西伯利方面に及ぼすべき事、前段之を述べたり。其の力の凝集が文化主義を土臺とせざるべからざる事は、建國の精神、帝業の根義、嘗て內に施せる懲肅懷柔併備の我が皇政に徵して、一點疑ひを容るゝの餘地なし。利權獲得と云ふも、之を得て獨り自ら貪らんとするにあらず。資本と智力を以て荒蕪を開き、富源を發き、而して之を利用し、併せて斯土の民を利し、其の智能を啓發し、其の向上進步を促さんとするにあり。即ち專ら文化主義を以て土臺とす。爾余一切の事、總て皆此の理に基つくものと知るべし。

滿蒙開發とは何ぞや、東洋の先進國たる日本が、支那の爲め、延ては東洋の爲め、北進せる勢力を此の地に凝集し、その上に文化と經濟を樹立し、以て新文明境を開拓せんが爲めの努力を指して言ふのみ。是れ敢て言を飾るにあらず、理數の當に然らざるを得ざる所なり。支那又は米國等にして猶之を悟らす、日本の此の行動を目して併呑慾、侵略慾のために行藏するものゝ如く曲解せば、飽まで其蒙を啓くに努め、而し

て徹底し得るまで邁往直進せざるべからず。中途半端の生温き事にては不可なり。使命の重くして責務の輕からざる、多言を費さずして明かなり。日本の海外發展は人口增加を基底とする眞に已み難き必至の勢にして、即ち自給自存の意を含むも、而も決して自我的ならず、利己的ならず、己を利すると共に併せて他を益し、共存共榮、互助互惠、以て廣く自他一般の利益幸福を擧ぐるを目的とす。文化的經濟的植民政策の眞諦茲に在り、滿蒙開發の眞意義亦即ち茲に在り。

附說（拓地、移植民、人種、民族、人口の諸問題）終

大正九年十月十五日印刷
大正九年十月二十日發行

定價壹册金壹圓貳拾錢

著作者　山田武吉　大連市淡路町十八番地
發行者　小松利宗　大連市松山臺二號地
印刷者　太田信三　大連市大山通七十四號地
印刷所　小林又七支店　大連市大山通七十四號地

不許複製

發行所　大陸社
大連市淡路町十八番地
電話一七五六番・振替口座大連一一八八番

每月壹回壹日發行

大陸

定價壹部
金四拾錢
郵稅壹錢
乃至貳錢

大陸之文化的宣傳

大連市淡路町十八番地

大陸社

電話一七五六番
振替大連一一八八番

終